
ブルースター

チエリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブルースター

【Zコード】

N1032E

【作者名】

チヨリ

【あらすじ】

大学時代、お互い好きだったのにその想いを口にすることができなかつた二人。4年後、偶然再会した二人は・・・。短編『再会。』からの続編となるお話です。こちらの作品は先に『再会。』をご覧くださいませ。300,000HIT記念企画特別番外編をサイトにて公開中デス！ <http://www.cherry-sozai.com/>

日本に帰国して3日。

「この辺もあまり変わっていないな・・・。」

俺・広瀬優一は、つい先日まで仕事でアメリカに行っていた。

仕事が早く終わり、まだ荷解きも完全に終わっていない

自分の部屋へと車で帰っている途中、

フロントガラス越しに見える景色が少し懐かしい。

目の前の信号が赤に変わつて横断歩道の手前で止まる

前方からこっちに向かつて歩道を歩いている女性の姿が

ふつと、視界に入つてきた。

・・・ナル・・・?

いや、まさか。

俺はその女性の姿と、昔密かに想つていた女の子の姿を重ねた。

・・・あれから、もう4年も経つのに・・・。

だけど、知らず知らずの内に俺はその女性の姿を田で追つていた。

そして段々と近づいてくるその姿に自分の田を凝つた。

・・・つ・・?

「ナルツ！？」

気がつくと俺は車を降りてその女性に声を掛けていた。

俺の声に少しだけピクリと反応をし、立ち止まつたその女性は

ゆつくりと顔をあげた。

「広瀬先輩・・・？」

あの頃と変わらない・・・いや、少しだけ女っぽくなつたナルの声。

「やつぱり・・・ナルだ。」

俺は思わず嬉しくて笑みがこぼれた。

ナルが田の前にいる・・・。

ずっと会いたかった人・・・千秋愛美が・・・。

「ホ、ホントに広瀬先輩・・・？」

ナルはまだ俺が田の前にいる事が信じられないのか
驚いた顔のままだ。

「うん！俺だよ。」

その言葉にナルはやつと笑顔を見させてくれた。

あの頃と変わらない笑顔・・・

だけど、4年前よりもずっと綺麗になっていた。

「・・・先輩っ！」

その笑顔に思わず俺が見惚れていると、いきなりナルが抱きついてきた。

「・・・えつ・・・ちよ・・・ナルッ！？」

予想外だ・・・。

パツパア―――ツ！――

突然、クラクションの音が鳴り響いた。

あ・・・

車、放置したままだつた。

すでに車道の信号は青に変わり、俺の車の後ろにいる車が

クラクションを鳴らしていた。

「ナル、乗つて。」

俺はナルの手を引き、助手席のドアを開けた。

「え・・・先輩・・・？」

「いいから、早くー。」

「あ・・・はい。」

戸惑っているナルを促し、助手席に乗ったのを確認して俺はアクセルを踏み込んだ。

「・・・あ、とにかくへ向かってる途中だった?」

とつあえずナルを半ば強引に車に乗せたはいいけど・・・

何か予定があつたんじゃないかと思い直した。

「いえ、そんな事ないですよ?」

ナルはすぐにそつ答えるとヒヒヒヒと笑った。

それはまたラッキー。

ナルに何も予定がなかつた事に俺は少しホッとした。

だつて・・・せつかへりして念えたのに、

すぐにはまたセヨナラなんてしたくなかったから。

「じゃ、せつかぐだかりのままメシでもビッつ?」

「はーー。」

嬉しそうに返事をしたナルが俺的には少し意外だった。

「ナル、何が食べたい?」

「んー・・・先輩は?」

「こいつちが聞いてんのに質問返しかよつ。」

「えー、だつて特にコレつてゆーのが思い浮かばないんでもん。」

「ははは、じゅー・・・和食は?」

「はー、全然OKですー。」

「んじゃ、決まりー！」

俺は瞬時に“脳内飲食店リスト”から特にお気に入りの店をチョイスして、

ハンドルをきつた。

「うわあ・・・きれい・・・。」

田の前に並べられた料理を見るなり、彼女は感嘆の声を漏らした。

高級料亭・・・とまではいかないけど気軽に立ち寄れる値段で

わりと本格的な和食を出す店。

それでいて堅苦しくない雰囲気が気に入っている店にナルを連れてきた。

「なんか食べるのもつたいないですねー。」

「そんな事言つて結局、全部ぺろりと食べちゃうんだが..」

「えへへ、ううですけどー。」

少し照れたように笑つたナルを見ているとまるで4年前に戻つたような気がした。

「じゃ、まずは乾杯。」

お互いグラスを傾けて“予期せぬ嬉しい再会”を祝つた。でもグラスの中身はノンアルコール・・・俺は車だし、ナルもあまり酒は飲めないから。

・・・といつづけで、ウーロン茶で乾杯した。

「ナルは相変わらず酒弱いのか？」

「さすがに大学の頃よりは強くなりましたよ？」

「じゃ、今度は飲みに行こう。」

「はい。」

ナルはにっこり笑いながら、意外とすんなり返事をした。

俺的には結構勇気を出して言つた一言だつたんだけだなー。

でもまあ、これで一応、次回の伏線をさりげなく張ることができた

な。

「先輩、お仕事何してるんですか?」

「一応、建築士。」

「わあー、じゃ夢が叶ったんですね!」

「とはいってまだ見習いだけどな。」

「それでもすいこですよー。」

俺は大学の時、建築学科だった。

将来は建築士になりたいとナルに話した事があつたつけ。

ナルはそれを憶えていてくれたのか。

「ナルは?どんな仕事してるの?」

「私はフツーに〇〇です。」

「事務系?」

「はい、営業事務です・・・といつか、営業のサポートみたいな感じです。」

「へえー。」

「先輩とさつ きばつたり会つた所の近くに会社があるんですよ。」

「そりなのか？じゃ、俺の職場からも近いな。」

「えつ！？先輩もあの近くなんですか？」

「うん、あの辺に『今井建築事務所』つて、あるの知らない？」

「あ、知つてます。有名な一級建築士の方の事務所ですよね？」

「うん、俺の先生。今、あそこで修行中なんだ。」

「えー！全然知らなかつた・・・そんな近くにいたのに

今まで会わなかつたのが不思議ですねー。」

「あー、俺は事務所に入つてすぐアメリカに行つてたからなあー。」

「アメリカ・・・？」

「うん、今井先生は世界で活躍している人だからね。つい3日前まで

俺も先生に付いてアメリカに行つてたんだよ。」

「そりだつたんですかー。あ・・・だから今日、和食にしたんですね？」

ナルはにやりと笑つた。

それから俺達は大学時代の思い出話に花を咲かせた。

俺とナルは学部は違つていたけれど同じ野球部にいた。

俺は小さい頃から野球が好きだったし、小学校の頃リトルリーグにも入つていた。

ナルも女の子にしては珍しく野球好きで、マネージャーとして野球部にいた。

いつも明るく笑いながら俺達部員のサポートをしてくれる彼女に

いつしか俺は惹かれていた。

だけど、どうしても想いを告げる事ができなかつた・・・。

ナルとの関係を壊したくなかったから・・・。

“先輩と後輩”・・・特別な関係でもなかつたけど、なんだかんだとよく一緒に遊んだりもしていた。

一人きりになる事もなくて、いつも部員のみんなと一緒にだつたけどそれでもよかつた・・・ナルと一緒にいられたから。

壊れるくらいならこのままの方がいい・・・。

そして、そのまま俺は卒業、就職とほぼ同時にアメリカに行く事が決まった。

アメリカへは最低でも3年は行く事になるだろつと言っていた俺は彼女への想いを断ち切ることに決めた。

もし、告白してうまくいったとしても・・・いきなり3年間・・・いや、もしかしたらそれ以上になるかもしないけど待つてくれなんて

言えなかつたからだ。

「愛美、おはよー。」

次の日、朝。

駅の改札を出たといひで会社の同僚・塚田智子と一緒にになった。

「おはよー。」

「昨日はちゃんと早く寝たみたいね？スッキリした顔して。」

「ああ？」

「うそ、全然顔つきが違うよ。」

それはきっと先輩に会えたから。

昨夜、また今度飲みに行こうと先輩が言つてくれて、

携帯番号とメアドを教えてもらつた。

それに名刺も。

寝る前、先輩に食事を¹⁰駆走になつたお礼を兼ねて

おやすみなさいとメールをしたらすぐ¹¹にメールが返ってきた。

そのおかげで昨日、恋人・・・もとい、元恋人の田高康成さんとあんな事があつて別れたばかりなのに私は朝から¹²機嫌だった。

「なんかいい事あつたの？」

「うん、まあね。」

「やつぱり？愛美はそーゆーのすぐ顔に出るからわかる。」

私、今どんな顔してんの？

会社に着いて更衣室に入ると、佐伯さんがいた。

あ・・・

佐伯千鶴。

私の1年後に入社した受付嬢の女の子だ。

「おはよひざれこます。」

私は田一杯平静を装つて笑顔で挨拶をした。

「・・・あ・・・、おはよひざれこます。」

佐伯さんは少し小さな声で言つた。

でも、私とは田を合わせようとしていない。

一人の間にビリードーな空気が流れた・・・。

“罪悪感？”

「なんかあつたの？」

佐伯さんが更衣室を出た後、智子が不思議そうな顔をしながら聞いてきた。

まあ・・・直接じやないけどね・・・。

「ううん、別になんにも。」

私は笑つて答えた。

それでも智子はどこか納得のいかない顔をしていたけれど・・・。

うちの会社は建築資材を扱つてゐる会社で、日本でも大手企業。

私はそこでの営業部で営業事務をしている。

事務・・・と言つても、実際には部署の中の“なんでも屋”みたいな感じ。

伝票入力や見積もり、データ管理からお茶汲みまで・・・
時には接待に借り出される事もある。

そーゆー時はだいたい“お酌係り”だけど。

ちなみに智子の彼氏・矢野純一さんも私と同じ営業部で

智子と私の元彼・康成さんは総務部。

康成さんは矢野さんと同期入社で仲もいい。

だからよく私と康成さん、智子と矢野さんの4人で

ダブルデートをしたり飲みにも行つていた。

私と康成さんが別れたつて言つたら二人はなんて言つかな・・・？

部署に行くとすでに矢野さんが来ていた。

「おはよー、愛美ちゃん。」

矢野さんは今日も朝から「機嫌だ。

「おはよー、机嫌です。」

「愛美ちゃん、昨日なんかいい事あったの？」

矢野さんは智子と同じ事を聞いてきた。

私、そんなに顔に出てるのかな？

「そんなににやけた顔します？」

「んー、にやけているって言つか……“いい事がありました。”って

顔に書いてある感じ。」

どんな顔……？

「昨日、田高とトークでもしたの？」

矢野さんは周りに聞こえなこよつに小声で言った。

私と康成さんが付き合つてゐる・・・もといもとい・・・

付き合つていた事は社内には秘密にしていたからだ。

知つてゐるのは矢野さんと智子だけ。

・・・と、後は佐伯さん・・・かな。

「・・・・。」

・・・ていつか別れました。

「ラブラブだねつ。」

私が何も答えないでいると、図星だと思つたのか

矢野さんはにやつと笑つた。

ホントはその逆なんですよー？

「一人にもその「つかせやん」と言わないとな・・・

いろいろ氣も使つてくれてたし。

お風休み、いつものように屋上に行つて青い空の下で

智子と一緒にランチタイム。

「ねえ、愛美、田高さんなんかあつたの？」

お弁当を食べ終わつた頃、智子が突然不思議そつに聞いてきた。

「なんで？」

「なんか朝からずっと様子がおかしいのよねえ・・・。」

「どんな風に？」

「んー、考え事してるみたいな感じだつたり、凡ミス連発したり・・・

・。 「

「ふーん。」

それは確かにおかしい。

康成さんは社内でも“仕事ができる人”で通っている。

だから普段なら絶対に凡ミスなんて有り得ないし、

仕事中、考え方なんて事もしない。

子供の名前でも考えてるんじゃない?

「“ふーん。”て、冷たいわねー?」

だって、私にはもう関係ないもん・・・。

「ケンカでもしたの?」

ケンカがひか別れたんだけどね・・・。

「・・・で、それなり綺美が朝から浮かれてないしねー?」

浮かれてって・・・

まあ・・・実際、浮かれてるんだひづけだ。

「・・・智子・・・あのね・・・。」

「ん?」

「私・・・康成さんと別れたの。」

「・・・えつー?」

智子は私の口から思つてみなかつた言葉が出たからか

反応するの少しひ間があった。

「別れたって……なんですよ……？」

「まあ……いろいろと……」

私は曖昧に答えた。

お昼休みの今はゆっくり話せないから……とにかくもあるけれど、すんなり別れたとは言え、一股かけられた事実と、そして子供が出来たことで

捨てられたという事実を昨日の今日で口にするのさうすと辛い。

「今度ゆっくり話すよ。」

「……うそ。」

私があまり話したがっていないのを察してか、

智子はそれ以上何も聞いてこなかつた。

「せっかくの休みの日なのに悪いな。」

「いえいえ。」

週末の土曜日。

私は今、先輩の部屋に来ている。

日本に帰ってきてから一週間・・・荷解きがまだ終わっていないらしい。

今日はそのお手伝い。

・・・なんだけど・・・

来て見てびっくり・・・

何がつて・・・

だつて・・・

あの夢の中と同じマンションに住んでたから・・・っ！

「・・・先輩、じいじて広がれへりこなんですか?」

「4LDK。」

「4・・・一?」

広いと思つたけど・・・めがけに広い・・・

「・・・一人暮らし・・・ですか?」

「やーだけど?」

先輩はしれつとした顔で言つたけど・・・

一人暮らしの広さじゃないでしょ・・・っ！

「ホントは2LDKでよかつたんだけど、会社から近いトコで考えたらココになつたんだよ。

まあ、大は小を兼ねるつてコトで、広くて困る事はないしね。」

「はあ・・・。」

それにして・・・

「あれ・・・？、なんか・・・引いてる？」

ちょっと呆れ顔の私を見て先輩は苦笑いをした。

お昼過ぎ、まだキッチンがまともに使える状態じゃなかつたから、

外で昼食を済ませてその帰りに収納ボックスや足らない食器類を

揃えるためショッピングモールへ寄った。

「先輩、こんなに買つものあるんですか？」

先輩が書いた買い物リストを見てまたびっくり。

調理器具はあるが、食器類もほとんど買わないといけなかつたから。

「・・・一体、どうやって生きてたんですか？」

調理器具も食器器もない生活つて・・・。

「いや・・・アリメカにいた時はほとんど外食だつたし、

忙しくて自炊なんてとてもできなかつたんだよ。」

「それでよく太りませんでしたね？」

「忙しかつたおかげで強制ダイエットになつてたみたい。」

「あはは、なんですかそれー？」

そんなに忙しかったのかな?

「けど、これからは仕事も少し落ち着くし、自炊もしないとな。」

「先輩、料理できるんですか?」

「あつ！バカにしてるだろ？これでも結構、料理はできる方なんだぞ？」

「じゃあ、得意料理は？」

「カレー。」

「・・・無難なモノ言いましたね？」

「バレた？」

「はい、私もこの手の話題の時には必ず“カレー”って言いますから。」

「なんだ、ナルも人の事言えないんじやないか。」

「私は“自称・三流シェフ”ですからつ。」

「それ、胸張つて言つ事じゃないだろつ。」

腰に手を当てて胸を張つて見せた私のおでこを、

先輩は指でツンと軽く弾いた。

一通り買い物をし終えて駐車場に向かっている途中、

見覚えのあるシャツを着た男性の姿が目に入った。

前方から康成さんと佐伯さんが一緒に腕を組んで歩いてきていた。

げげ・・・っ。

こんな感じで会つなんて・・・、

どじが逃げるどじは・・・。

「ナル、どうした?」

急にスローダウンし、キヨロキヨロし始めた私を不審に思ったのか、

先輩は首を傾げた。

「愛美?」

遅かった。。。

逃げる間もなく、あつさり康成さんに見つかってしまった。。。

「あ・・・こりにちは。」

とりあえず笑顔で言つてみたけれど、さつと弓を響つている。

佐伯さんは私の顔を見た後、隣にいる先輩を見て眉を顰めた。

康成さんもあまり顔に出でていなければ、私が男性といふ事に

ちょっと驚いたみたいだった。

私は一人が並んでいる姿を見てちょっと胸がズキリとした。

だつて・・・あまりにもお似合いだったから・・・。

「へえー、千秋さんも変わり身が早いですねえ？もう次の人気がいる
なんて。」

「・・・おい、千鶴。」

佐伯さんはどうやら先輩を新しい彼氏だと勘違いしているみたいだ。

「だつて、そうじやない？それとも・・・案外、康成さんも

一股かけられてたんじやないの？」

・・・む。

「そんな訳ないだろ？」

否定しようとした私よりも先に口を開いたのは康成さんだった。

「愛美はそんな女じゃない。」

声は荒げてはいないものの康成さんは明らかに怒っているのがわかつた。

「どうして別れた女の事なんて庇つなのよ？」

康成さんが私を庇つたのが気に入らないのか

佐伯さんは不機嫌モード全開になつた。

あらり・・・。

「何を勘違いしてるとかは知らないけど・・・、俺はただの友達ですよ。」

今度は先輩が口を開いた。

「・・・それに、もし俺が彼氏だとしても、

その彼が言ったようにナルは一股なんかする子じゃないですから。

「

そして今度は佐伯さんに少し強い口調で言った。

「行け。」

先輩は私に少しだけ視線を向け、康成さんと佐伯さんに

「失礼。」と言い、歩き出した。

私は一人に視線を向ける事無く、先輩の後を追つた。

「・・・先輩、ありがとうございました。」

一人の姿が見えなくなつた頃、私が庇つてくれたお礼を言つと、

先輩は黙つたまま私を見つめ、そつと手を握ってくれた。

だけどその日は怒つて いるみたいだった。

私にじゃなくて、あの一人に対して・・・。

先輩はそれからずっと無言だった。

・・・帰りの車の中でも。

先輩の部屋に戻つて荷物整理の続きを していると私の携帯が鳴つた。

あ・・・この着メロ・・・。

康成さんからだ・・・。

そういえばまだ康成さん専用の着メロにしたままだった。

忘れてた・・・。

「ナル、携帯鳴ってるよ?」

電話に出ようとしない私に先輩が不思議そうに言つた。

「あ・・・はい・・・。」

今さら・・・なんの用?

「・・・ナル?」

・・・早く切れないかな?

「・・・もしかして・・・わたくしの男から?」

気がつくと先輩が目の前に来ていた。

「・・・はい。」

「元彼・・・?」

先輩は珍しく直球で聞いてきた。

私は黙つたまま頷いた。

携帯は・・・まだ鳴り続けたままだ。

「ナル・・・。」

電話が切れでシン・・・と静まり返つた部屋に

先輩の声だけが微かに響いた。

「・・・ナル・・・・。」

先輩はもう一度、私の名前を呼ぶと大きくて暖かい手で私の頬を包み込んだ。

そして何か言いたそうな顔をしている。

それがなんだかとても切なくて苦しそうで・・・。

「先輩・・・?」

「どうして・・・そんな顔してるの?」

少し長い沈黙の後、先輩は少しだけ息を吸い込んで思い切ったように口を開いた。

「・・・ナル・・・ナルはまださつきのヤツの事・・・好きなのか？」

「いえ・・・今はもう・・・そんな事ないですよ。」

れいわはちょっと動搖しちゃったけど・・・。

「そりゃ、さすがにまだ笑って康成さ・・・さつきの彼とは

話せませんけど・・・。」

「・・・どうして別れたの？」

今日の先輩はなんだかへンだ。

いつもなら絶対にこんな踏み込んだ事、聞いてこないのに・・・。

「・・・一股かけられてたんですね。」

「もしかして……やつをいた女と？」

「……はい。それで……その子が妊娠しちゃったみたいで……

結局、私……捨てられちゃつ……」

私が全部言い終わらないうちに先輩は力強く私を抱きしめた。

「「「めん……辛い事話させて……。」」

先輩は別れた理由を聞いたことを後悔するように言つた。

私は首を横に振つた。

「私……今は別れてよかつたって思つてるんです。

彼にフラれてから、なんか一気に冷めちゃつて……

それに、あの子の方が私よりずっとお似合いだったし……。

「ナル・・・。」

「多分・・・子供ができてなくとも・・・きっと私・・・」

「そんな事ない。」

先輩は少し強い口調で言った。

「俺なら・・・ナルの方がいい。」

そんな事言つてくれるの・・・先輩だけだよ。

「俺なら・・・絶対にナルを選ぶ・・・

その前に、そもそも・・・一股なんて事もしないけど。」

「そうだね・・・先輩はそんな事しそうにないもんね。」

「・・・だから・・・、俺をナルの恋人にして？」

え・・・?

私は一瞬、耳を疑つた。

「大学の時からずっとナルの事が好きだつた・・・

けど、それを口にしたらナルとの関係が壊れる気がして、
言えなかつたんだ・・・。」

先輩も私の事を・・・?

「卒業してからもずっとナルの事が忘れられなくて・・・

今でも・・・好きだ。」

あの頃からずっと・・・?

私はすくべドキドキしていた。

康成さんに告白された時よりももっと・・・ずっと・・・。

「ナルがまだ付き合つ氣になれないなら・・・、

俺を受け入れてくれる氣になるまで待つから・・・。」

そんな・・・そこまで・・・

気がつけば私は涙を流していた・・・。

「・・・ナル?」

先輩が少し驚いて顔を覗き込む。

「・・・俺じや・・・ダメ?」

ちがうみ・・・先輩。

嫌で泣いてるんじゃないよ・・・。

嬉しくて涙が溢れて声にならない私は、首を横に振るのが精一杯だった。

先輩は泣き続ける私の背中を優しくあやすように擦ってくれた。

「・・・嫌で泣いてたんじゃないんです。」

ようやく涙が止まつた私は少しだけ先輩に笑つて見せた。

「・・・?」

先輩は、じやあ、なんで?言つた顔をしながら指で涙を拭ってくれた。

「先輩が私の事、好きだつて言つてくれた事がすゞく嬉しくて……」

私がそう言つと頬に触れていた先輩の指が微かに震えた。

「私を……先輩の恋人にしてくれますか……？」

「……ナル。」

先輩は驚いた顔をした。

「告白したと思つたら、告白返し?」

「はい。」

だつて、私も先輩の事好きだつたから。

それに……今でもきっと好きなんだと思つ……

こんなでギュギュしてゐるから・・・。

「 もういー。」

先輩は悪戯っ子にしてやられたとこつた感じでギュッと私を抱きしめた。

「私も・・・大学の時、先輩の事・・・好きだったんですよ?」

「え・・・?」

「でも、言えなかつたなんですね。」

「どうして?」

「私も先輩と同じです。先輩との関係が壊れるのが嫌だつたから・・・」

「そつか……。」

「思い切って告白すればよかつたなあ……。」

「……なら、これから4年分を取り戻せばいいだろ?」

先輩はクスッと笑うと優しく私の唇にキスを落とした。

長い、長いキス……。

まるで本当に4年分のキスをするみたいに……。

週明け、月曜日。

先輩と付き合ひ事になつて幸せの絶頂にいた私を

“とある事件”が待つていた。

週明け、月曜日の朝。

いつものように出社し、部署に向かうエレベーターの中、

康成さんに出くわした。

最悪・・・。

だけどまだ一ときりじゃないだけマシか。

エレベーターの中には、私と康成さんの他に男性社員一人と

女性社員が一人いた。

「おはようございます。」

あまり顔を合わせたくないけれど、それでも一応挨拶だけはする。

「・・・ねむよつ。」

康成さんは少し俯きながら田を畠わせなこよつて言つた。

あまり顔をみられたくないといった感じだけど、

その理由はすぐにわかつた。

顔に痣がある。

誰かに殴られたよつた痕・・・。

土曜日に見かけた時にはなかつたといつ事は・・・

あの後か昨日、何かあつたのだろうか?

もしかして・・・

土曜日の一件で佐伯さんに“グーパンチの刑”にでもされたのかな?

まさか・・・ね?

だって、いくらなんでも女の子の力じやあんな痕は残らないだろつ

し・・・。

昼休憩、珍しく矢野さんが私と智子に会口流し、一緒に「お食い」はんを食べよつと言つて來た。

「珍しいですねー？」矢野さんが私達と一緒に「お食い」飯食べよつなんて。

ホントはなんとなく理由はわかつていた。

多分・・・康成さんの事。

「ん・・・まあ・・・。」

矢野さんはなんだか曖昧に返事をした。

智子もちよつと複雑な顔をしている。

あー、絶対、康成さんの事だ・・・。

私の予感は的中し、矢野さんは少し間を空けた後、

「あのれ・・・田高の事なんだけど・・・。」

と、少し慌てて口元を隠して口を閉じた。

ほら、当たった。

「愛美ちゃんはいつから知つてたの?」

「?」

「・・・田高が佐伯さんとも付き合つてたの。」

「聞いたなんですか?」

佐伯さんの名前が出たという事は、私と康成さんが別れた理由も知つていいという事……康成さんに聞いたのかな？

「一昨日偶然、佐伯さんと一緒にいる所を見たんだ。

それで……昨夜、田高を呼び出して問い合わせた。」

「やつですか……。」

土曜日……矢野さんもどこかで康成さんと佐伯さんの姿を目撃してたんだ。

「私……田高さんと愛美はてつぱり上手くじつてるんだと思つたのに……。

なんで言つてくれなかつたの？」

智子はなんだか私よりショックを受けてるみたいに言つた。

「あー・・・私も先週、康成さんから別れてくれって言われたとき

初めて知ったから・・・。」

「なんだよそれ・・・。」

矢野さんは怒りを押し殺したような声で呟いた。

「智子、先週私が変な事言つてたの憶えてる?」

「あー、なんかおかしな事言つてたねー。」

「・・・実はあの時ね・・・」

私は一週間前に見た、幻覚のよつな白痴夢のよつな・・・

あの夢の話をした。

「・・・で、その日の夜に夢の通りに康成さんに呼び出されて

別れてくれって言われたの。

その時にね、佐伯さんに子供でもできた？って聞いたら、

『知つてたのか？』ってあつさり認めたから、

平手打ち喰らわして、水ぶつ掛けでよなうしてやつた。』

ちょっと笑いながら話す私を智子と矢野さんは啞然としながら見ていた。

「そんな事つてあるんだ・・・？」

信じられないといった感じで智子と矢野さんは顔を見合せた。

それはそうだろう・・・夢を見た本人・・・私だって

信じられなかつたんだから。

「不思議なことに私・・・今はもう全然康成さんの事、気にしてないの。」

だつて・・・あの時、別れていなかつたら・・・

先輩とも未だに再会できていなかつたかもしれないし・・・。

そう思つて、むしろ別れてよかつたんだとれど思える。

「ホントに?」

智子は私が強がりで言つてゐるんだと思つていろりしご。

心配そうな顔で私の顔を覗き込んだ。

「うん。」

私は笑つて即答した。

「それにね・・・実はその日康成さんと別れた後、夢に出てきた先輩に会えたの。」

「「えーつー?」」

「それでー・・・」

「まさか・・・その人ともう付き合つて始めたとかいう驚愕の展開?」

智子は私が言い渋つてゐる事をまんまと言い当てる。

「…………うん…………その、まさかだつたりして……。」

「「えーつー?」」

「愛美、展開早すぎつー!」

「いや、私もそう思つたんだけど……。」

「それでの次の日、愛美が超ご機嫌だつたんだ?」

「あ…………でも、付き合つ始めたのは土曜日からだつたりして……。」

「「それにしたつて…………早によ…………。」」

智子と矢野さんは苦笑いした。

「だからー…………そのー…………智子も矢野さんももう氣にしないで……。」

ホント…………ごめんね、ありがとつ。」

「んー、まあ…………愛美ちゃんがもう氣にしてないなら…………よか

つた。」

矢野さんは私に柔らかい笑みを向け、少し安心したように言った。

「じゃー今度、その新しい彼氏紹介してよ。

「股かけるような男かどうか見てあげるー。」

智子は矢野さんは対照的に意地悪そうな顔をした。

「もうつ、先輩はそんな人じゃないよつ。」

「あはは、冗談よ。」

智子はすぐににっこりと笑つて言つたけど・・・

ホントに[冗談で済むのかな?]

しばらくは先輩とは会わせないほうがいいのかもしれない・・・。

「だけど、あの田嶋さんの顔の痣……ビーしたんだりつね?」

お弁当を食べ終わった後、食後のコーヒーを3人並んで飲んでいると、

智子も気になっていたのか、不思議そうな顔をしながら言った。

すると矢野さんが何食わぬ顔で答えた。

「あー、それ俺がやつた。」

「えつ…?」

私と智子は同時に声をあげて驚いた。

「昨夜、あいつを呼び出して愛美ちゃんと別れた理由聞いたときには、
ものすじぐムカついたから、思いつきり一発ぶん殴つてやつたんだ。

・・・あ、それと俺、ついでにあいつと友達の縁も切つたから。

ポカンと口を開けたまま驚いている私と智子に、

矢野さんはさうと笑つてニシと笑つた。

。あの痣は・・・矢野さんからの“グーパンチの刑”だつたんだ・・・

ナルと再会してから一週間が経つた。

そして付き合い始めて4日目の今日・・・6月14日は

ナルの25回目の誕生日だ。

昨夜、ナルに電話をして今日の夜、待ち合わせをした。

もちろん、ナルと一人きりでお祝いをする為。

・・・な、の、に、だ・・・。

「今夜、取引先から急に接待が入ったから広瀬も来い。」

と、今井先生からの無情なその言葉で俺の“一人だけでナルの誕生日会計画”は

見事に夢と散つた・・・。

なんどよつによつて今日なんだ？

せつかく、いろいろ店までリサーチして予約して、
密かにプレゼントも準備してたのに・・・。

俺は心の中で“鬼だ！悪魔だ！”だと嘆きながら、

顔も知らないその取引先の奴らを恨んだ。

午後7時。

俺は今井先生と先生の一人娘・澄子ちゃんの三人で、とある料亭に向かっていた。

澄子ちゃんは将来、先生の跡を継ぐ予定だ。

その為に大学で建築学科を専攻していて

先生の事務所でもアルバイトをしている。

だから、いつして何かと言うと先生にいろいろと連れまわされてい

る。

つい一〇の間、20歳になつたばかりだからお酒の席にも連れて行けるようになつた。

料亭に着き、通された座敷に入ると取引先の連中はすでに来ていた。

連中・・・といつても営業部長のその部下の一一人。

後からもう一人女性が来るらしいが。

挨拶と名刺交換をして俺はその部下の男を見て驚いた。

「矢野！？」

「広瀬つ！？」

その男も俺の顔を見るなり、驚いていた。

その男・・・とは、矢野純一。

高校の同級生で俺と同じ野球部だった奴だ。

「久しぶりだな、広瀬。」

「おう、まさかお前が取引先だつたなんて思わなかつたよ。」

「俺もまさかお前が今井先生のここにいるなんて思つてもみなかつたよ。」

俺と矢野がそんな会話をしていると、仲居に案内されて、

女性が一人入つてきた。

「遅くなつてすみません。」

「あ、愛美ちゃん、いらっしゃ。」

・・・ナルミチャン？

俺は矢野の隣に座つた女性の顔を見て、また驚いた。

「ナルミ！？」

「あつ！先輩！？」

「愛美ちゃん、広瀬と知り合い？」

「はい、大学の時の先輩なんです。」

……て、ここでそんな事言えるワケないか。

「矢野さんも広瀬先輩とお知り合いだつたんですか？」

「広瀬とは高校の時の同級生で同じ野球部だったんだよ。」

「へえー、そーなんですかー。」

そういうえばナルの会社は建築資材を扱つてゐるつて言つてたな。

もしかしたら、取引があるかもしれないと思つていたけど……。

矢野が『』の営業部といつ事は、ナルは矢野と同じ部署なのか。

今日の接待は堅苦しいものではなく、新しく『今井建築事務所』の担当になつた

矢野との顔あわせと俺と澄子ちゃんの紹介を兼ねた親睦会みたいなものだつた。

ナルはいつも接待の席にも慣れている様子で、

絶妙のタイミングでみんなにお酌をしていた。

大学の頃は飲み会と言えばみんなテキトーに飲むだけ飲んでいたのに、

そういう姿を見るとあの頃のナルとは違つんだな……と思つ。

澄子ちゃんは・・・さすがにまだそんな気は回せないみたいだ。

親睦会が終わつた帰り、

「愛美ちゃん、送つて行くよ。」

・・・と、矢野がナルを送つて帰ると言い出した。

それはダメだろつ？

「あ、いえ、大丈夫ですよー？」

「ダメダメー。愛美ちゃんを放置して帰つたのがバレたら智子に殺される。」

「でも、矢野さん、逆方向じゃないですかー？」

「だつたら、俺が送つて帰るよ。」

俺はナルと家の方向が同じだしな。

「む、それはマズい！」

矢野はそつそつと急に俺の前に立ちはだかった。

「何がビリマズいんだよ?」

「“送り狼”になる可能性があるからな?」

矢野はにやりとした。

「コイツ……昔、俺が部活で遅くなつた時にマネージャーの女の子を家まで送つてそれが切欠で付き合ひ事になつたのを思い出したな……。

「あ……矢野さん、大丈夫ですよ?」

「愛美ちゃんはコイツの裏の顔を知らないからそんな事言えるんだよー。」

「裏の顔つて……。」

「コイツは昔……もがつ……。」

俺は咄嗟に矢野の口を塞いだ。

「矢野……余計な事言つなつて。」

「あ、あの・・・矢野さん、広瀬先輩ならホントに大丈夫ですよ。

それに、先輩なら同じ方角ですし・・・。」

そうそう。

「・・・？・・・愛美ちゃん、広瀬の家知つてんの？」

矢野は俺の手を口から引き剥がし、ナルに不思議そうに聞いた。

「えつ！？・・・あ・・・つ！・・・え、えーと・・・」

俺は実家を出て、一人暮らし・・・といつ話まではしたけど

どこに住んでるとまでは言つていない。

それに気付いた矢野・・・そして慌てるナル・・・。

「・・・て・・・愛美ちゃん・・・もしかして、

昨日言つてた先輩つて・・・」

「あ・・・えーと・・・はい・・・実は・・・。」

ナルの顔が少し赤くなつた。

「あ、そーなんだ? そつか、そつか! んじや、後は広瀬に任せた!」

矢野はなんだか急に態度を「口ロツ」と変えた。

・・・なんだ?

なんなんだ、一体?

そして、訳がわからないまま、

俺とナルはタクシーでナルの部屋へと帰つた。

「私の部屋、先輩のところよりも随分狭いから、

「ああ、びっくりすると困りますよ。？」

「どれくらいこの辺をなの？」

「一ノ口ですか。」

そう言いながらナルは部屋の鍵を開けた。

「先輩、どうぞ。」

「お邪魔しまーす。」

ナルが言っていた通り、部屋は俺のマンションよりも随分狭かった。
だけど、彼女の部屋はあまり物が置かれていない所為か、
窮屈だとは感じなかつた。

「先輩、飲み物何がいいですか？」

「うーん・・・」「一ノ口・・・かな?」

「はーい、じゃ、適当に座つて待つてください。」

「うん。」

そして数分後、ナルは熱いコーヒーを俺に出してくれた。

「先輩、コーヒーはブラックでしたよね？」

「うん。」

大学の頃からずっと俺がブラックしか飲まないのを憶えててくれたんだな。

「ナルはいつも甘ーいカフェ・オレだったよな？」

俺がそう言ってにやりと笑うとナルは「えへへ。」と可愛く笑っていた。

「しかし、驚いたな・・・まさか接待の席にナルが来るなんて思つてもみなかつたよ。」

「今日は私も急に“お酌係り”で借り出されたんです。」

「あはは、そーなんだ?・・・けど、そのおかげで会えたからいいけど。」

「そーですね。」

「だけど、なんで矢野の奴、急にナルを俺に任せるとか言い出した

んだろうな?「

「あー、それは……。」

少し恥ずかしそうにナルは昨日、矢野に俺との事を話したと説明してくれた。

なるほど……それでか……。

あ……それよりも……。

今、何時だ?

「あ、先輩、時間大丈夫ですか?」

急に腕時計で時間を確認した俺にナルが言つた。

まざい、まざい……。

もう一時だ。

ナルの誕生日が後一時間で終わつてしまひじゃないか。

「ナル、目瞑つて。」

「え・・・？」

「早く。」

「あ・・・はい。」

ナルが目を瞑つている隙に俺はカバンの中からプレゼントを出した。

「もうひ開けていいよ。」

俺がそう言つとナルはゆっくりと目を開けた。

そして目の前に置かれたプレゼントが視界に入ると目をパチパチとさせた。

俺はそんなナルの様子が可笑しくてつい吹き出してしまった。

「早く開けないと誕生日終わっちゃうだ？」

「へ・・・?、誕生日・・・?」

「おいおい・・・自分の誕生日も忘れたのか?」

「私の誕生日・・・?・・・あつ!」

「ホントに忘れてた?」

「・・・・ちよつとだけ・・・。」

「ウソつか、すっかり忘れてただろう?」

俺がおでこをシンとつづくとナルはコクンと頷いた。

「誕生日おめでとう。」

「先輩・・・憶えてくれたんですか・・・？」

「当たり前だろ？本気で好きな女の子の誕生日は何年経つても忘れ
ないよ。」

そう・・・“本気で好きな女の子”は・・・な。

私と広瀬先輩が付き合い始めて一週間が過ぎたある朝、
一通の社内メールが届いた。

別になんて事はない毎月全社員に届くただの社内報のメール。
だから私も何気なくザツと目を通すつもりで開いた。

すると、とあるパートナーに康成さんの名前が載っていた。

社員の結婚や出産などおめでたい記事が載っているパートナー。

その中に佐伯さんと婚約したと書かれていた。

一人の幸せそうなツーショットと一緒に載っている。

婚約したんだ・・・。

私が感慨深くその記事を見ていると隣からものすごい視線を感じた。

「・・・な、なんですか・・・？」

隣に座っている矢野さんがじつと私を見つめていたのだ。

「・・・いや、別に・・・。」

そう言つたわりに矢野さんは何か言いたそうな顔をしていた。

おやりく康成さんの記事を見て私がまた傷ついたと思つたんだろ？

「私なら全然平氣ですよ。」

そう言つてみせても矢野さんは私の顔をじつと見つめている。

「・・・。」

“全然平氣”・・・その言葉に嘘はない。

だつて、別にこの記事を見ても傷ついたりなんてしていいから。

ただ・・・“捨てられた”といつ傷は正直まだ完全には癒えていない。

「ホントですって。」

傷は癒えていないけど、私は今、一人じゃない。

広瀬先輩がいるから・・・。

だから、今こうして矢野さんにも笑顔を向ける事ができる。

私はこり笑つて見せた。

すると、矢野さんも安心したのか、

「・・・うん。」

と言つて、少しだけ笑つた。

それからさらに2ヶ月が過ぎた週末、土曜日。

「最近、週末はずつと先輩の部屋で一緒に過ごしていた。

だけど、今日は自分の部屋に一人でいる。

先輩が休日出勤になってしまったから。

そんなワケで突然暇人になつた私は一人、部屋でゴロゴロしていた。

暇だなあ・・・。

これといって特に趣味もない私は時間を持て余していた。

大学の時はいつも誰かと一緒に遊んでたり勉強したりしてたりして、就職してからは康成さんと一緒にだった。

そして、康成さんと別れたらとほぼ同時に先輩と付き合い始めたし。

考えてみれば、今までまともに一人になつた事はなかつたのかも。

だけど休日出勤なんてこれからだつてフツーにあるだろ? し・・・、

一人の時間の使い方を考えておく事も必要・・・だよね?

“ 一人の時間の使い方 ” ．．． 何をすればいいんだろう？

私はベッドに寝転んだまま目を閉じて考えた ．．．

そして ．．．

いつの間にか寝てた。

．

「 ．．． んあつ？」

携帯の着メロで私は目が覚めた。

・・・あ、先輩だ！

広瀬先輩専用の着メロが鳴り響いていた。

「もしもし。」

『俺・・・なんかしてた?』

私がなかなか電話に出なかつたからか、

先輩は少し遠慮がちに言つた。

「あ・・・いえ、大丈夫です。」

・・・実は寝てました。

窓の外を見るとすっかり暗くなつていた。

私は部屋の灯りを点けてベッドに腰掛けた。

時計をみると・・・

え・・・つ・・?

もう一〇時!?

私・・・どんだけ寝てたの・・・?

『明日なんだけどさ・・・』

“浦島太郎状態”的私は先輩の声でハツとした。

「あ、はい・・・?」

『明日も仕事でちょっと会えそうにないんだ・・・。』

「そうですか・・・。」

明日も会えないのか・・・。

ホントなら今からでも会いたいと思つていたけど、

明日も仕事なら“会いたい”なんて言えない・・・よね？

それに先輩は仕事帰りできっと疲れているだろうし・・・。

『・・・』めんな。』

電話の向こうから聞こえる先輩の声は少し疲れているようだった。

「気にしないでください。」

『・・・うん。』

「今週会えなくとも来週があるじゃないですかー。」

『・・・うん、そうだな。』

私と先輩はそれから少しだけ話をした。

別になんて事はない話だけど、それでもやっぱり先輩と話していると楽しい。

電話を切った後、しばらくして先輩からメールが届いた。

毎日届く“おやすみメール”。

付き合い始めてから、先輩は毎日欠かさず送ってくれている。

仕事で遅くなつて電話で話せない日があつても朝起きると届いている。

そしていつも私はちょっと幸せな気持ちでメールを返していた。

次の日、日曜日。

お昼過ぎ、天気も良いしずつと部屋の中にいるのも

もつたいないのどちらと街ぶら。

特にこれといって買うものもないけれど、

だけど何気なく入ったCDショップでちょっと気になるモノを発見した。

先輩が見たいと言つていた映画のDVD。

ちょうど今日が発売日らしい。

しかも初回生産の特典付き・・・！

先輩は仕事に行って買う暇がないだろうし、

なにより人気の映画だから買えなくなる可能性がある。

現に目の前で数人が買って行った。

「ここは買つとくしかないっ！」

私は自分の部屋に帰る前に先輩の部屋に寄る事にした。

合鍵はすでにもらっている。

きっと多分、まだ仕事から帰ってきていないだろうけれど・・・。

先輩・・・部屋に帰つて、いきなりこのDVDが置いてあつたら
びっくりするかな？

どんな顔するだろ・・・？

私は先輩の驚く様子を想像（妄想？）しながら、先輩のマンションに向かった。

電車を降りて、駅の改札を抜けると雨が降っていた。

この間に降り始めたんだね！

電車の窓から見えていたはずなのに想像してて全然気がつかなかつた。

先輩のマンションは駅からそんなに離れていない。

だけど、結構などしゃぶり・・・にわかるよつた気もするけれど

といつあんず駅の中にあるマンションで傘を買つた。

先輩のマンションに着いた頃、さうに雨は強く降り始めた。

傘を買つて正解だったかも。

エレベーターに乗つて先輩の部屋がある7階で降りると、

雷まで鳴りだした。

嵐でも来るのかな・・・？

でも、天気予報では台風情報なんてなかつたし・・・。

そんな事を思いながら、私は先輩の部屋の鍵を開けた。

だけどドアノブに手をかけ、開けようとして鍵が閉まつて いる事に気がついた。

鍵・・・開いてたのを閉めたのかな・・・？

鍵・・・開いてたのを閉めたのかな・・・？

私はもう一度、鍵を回してドアを開けた。

やつぱり・・・開いてた？

先輩・・・帰つてゐるのかな？

「先輩・・・？」

とつあえず中に向かつて呼びかけてみる。

玄関まで入つたところでシャワーの音が聞こえてきた。

お風呂？

やつぱり帰つてゐるんだ。

するとリビングから先輩が顔を出した。

「ナルツ！？」

先輩は私が来たことに驚いたようだ。

「あれ・・・？先輩・・・お風呂に入ってるんじゃ・・・」

「え・・・？」

先輩は少し青ざめた顔になつた。

先輩がここにいるといつ事は・・・

お風呂に入っているのは・・・誰？

なんだか嫌な予感がした。

そして、その嫌な予感は的中した。

玄関に女の子の靴がある・・・。

もちろん私のじゃない。

「・・・」

うそ・・・

「ナル・・・」

私になにか言いたそうな顔をして近づいてきた先輩の髪は濡れてい
た。

お風呂あがりみたいだ。

私はそれに気がついた瞬間、咄嗟に先輩の部屋を飛び出した。

「ナルツ！待つて・・・っ！」

先輩はすぐに私を追いかけてきた。

来ないで・・・！

・・・来ないで、来ないでっ！

私はエレベーターに駆け込み、急いで開閉ボタンを押した。

「ナ・・・」

ドアが閉まり、先輩の声が聞こえなくなつた途端、涙が溢れてきた。

先輩は違つて思つてたのに・・・っ。

仕事なんて嘘じゃない・・・っ！

私・・・また二股かけられてたの・・・？

エレベーターを降りてマンションを出た後、

私は雨の中を走った。

駅とは違う方向に傘もささず・・・。

夢中で走って、走って・・・

走っている間・・・ずっと携帯が鳴っていた。

・・・先輩専用の着メロ。

それでも私は走り続けた。

思いつきり走って、疲れて・・・そして立ち止まると、

雨はすっかりあがっていて、暗くなつた空には

薄つすらと月が見えていた。

私は携帯をバッグから出して電源を切つた・・・。

翌日、月曜日。

昨日、雨の中をずぶ濡れになつて走つていた私は

風邪をひいて会社を休んだ。

でも、本当は先輩の事がショックだったから・・・。

風邪の方は体は重いけど熱もなく、少し喉と頭が痛い程度。

先輩の事がなければ普通に会社に出ているだろ。

要するにちょっとズル休み。

だから、今はベッドに寝てこるワケでもなく、

ボーッとしながらテレビを見ている。

会社からかかってくるかもしれないから一応携帯の電源は入れておいた。

時々、先輩専用の着メロが鳴っている。

なんとかけてくるの・・・?

もう私の事なんて放つておいてよ・・・。

数時間おきに鳴る携帯・・・それでも私は出なかった。

夜になつて先輩からの電話もなくなつた。

そしていつもなら畳いていた“おやすみメール”も昨日からない。

涙がポロポロと溢れてきて自分でも気がつかないうちに

こんなにも先輩の事が好きだつたんだと思い知らされた気がした。

康成さんの時は、一股かけられてたとわかつた瞬間、

すぐに冷めていつたのに今回は違う・・・。

康成さんに捨てられた傷もまだ完全に癒えていないうちに

先輩に一股かけられていたのが発覚したからかもしれないけど・・・

私・・・立ち直れるのかな・・・。

翌日、火曜日。

さすがに一日もズル休みをするワケにもいかず、

私はとりあえず出社した。

風邪の方も昨日おとなしくしていたおかげで

すっかり良くなつた。

「昨日、広瀬と雨の中トークでもしたの？」

矢野さんはククッと笑うと

「あいつは今日も寝込んだままみたいだけど、

愛美ちゃんはもう平氣なの？」

と言つた。

・・・寝込んだまま？

今日も・・・て・・・？

「・・・広瀬先輩・・・どうかしたんですか？」

「えつー…？愛美ちゃん…・・知らないの？」

先輩の様子をまるで知らない私に矢野さんは驚いたようだった。

「昨日、あいつと仕事の事で打ち合わせする予定だったんだけど、会社休んだみたいでさ、風邪が酷いらしくて…」

さつき電話したら今日も寝込んでるらしい。」

・・・え・・・。

「日曜日、雨に濡れたまま長時間外にいたとか言つてたなー。」

長時間で・・・。

「・・・。」

9円にはいったばかりでまだ夏の暑さは残っていても、

夕方には気温は下がる・・・それにあのどしゃ降り。

その中を濡れたまま長時間外に・・・？

どうして・・・？

・・・いや、そんな事よりも・・・そんな状態でずっと外にいれば

風邪をひくのは当たり前で熱だつて出していたつておかしくない・・・

それにあの先輩が仕事を休むなんて相当酷いのだろう・・・。

先輩・・・大丈夫なのかな・・・？

夕方。

定時を少し過ぎた頃、矢野さんが「早く帰れ。」と言いました。

「愛美ちゃん、病み上がりなんだから今日はもう帰りなよー？」

「え・・・あ、はい・・・。」

はい・・・とは言ったものの、私はまだ帰る気にはなれないでいた。

先輩の事は正直、ものすごく気になつてこるし、

今すぐここでも先輩のマンションに行きたかった。

だけビ・・・先輩の部屋に“彼女”が来ているかもしれない・・・。

そつ思つとやつぱつ私は行かないほうがいいんだと思つてしまつ。

今朝からずっとやの繰り返し・・・先輩のところへ行きたくて・・・

でも、“彼女”と鉢合わせになるのが怖くて・・・。

そして・・・とうとう定時を過ぎてしまつた。

「愛美ちゃん・・・マジで今日はもう帰りなよ・・・

早くあいつのところへ行つてやれつて。」

なかなか先輩のところへ行く勇気が出ない私の背中を押してくれた

のは

矢野さんの言葉だった。

もちろん、矢野さんは先輩が一股をかけてるなんてことは知らない。

だから先輩のところへ早く行けと強く言える。

私は矢野さんの言つとおり、先輩のマンションに行く事にした。

電車の中や、先輩のマンションへ行く間、ずっといろいろ考えた。

“彼女”が来てたらどうしようか・・・?とか、

私が行つたら先輩はなんて言つだらうか・・・?とか、

それとも、寝込んでるだろうか・・・?とか・・・

実は“彼女”の部屋で寝てるのかも・・・?とか・・・

マンションの下まで来て立ち止まり、

エレベーターを降りてまた立ち止まり、

そして先輩の部屋の前でまた立ち止まり、

私はインターフォンを押せずにいた。

けど、いつまでもこじりこじり突っ立つていたって仕方がない。

しばらく考え、私は思い切ってインターフォンを押すこととした。

もし、"彼女"と鉢合せになつたら……その時はその時！

ええいっ！

儘よ！

……ピンポン……。

……。

先輩・・・いないのかな？

中からは誰もでてくる様子がない。

私は恐る恐る合鍵でドアを開けた。

玄関には・・・昨日見た女の子の靴はない。

先輩の靴だけ。

そのことに少しホッとして、それでも私はおずおずと薄暗いリビングに入り、

部屋の灯りを
点けた。

先輩寝てるのかな？

寝室のドアを開けると、廊下の灯りに照らされてベッドの中で寝ている先輩が見えた。

少し近づいてみると、なんだか苦しそうだ。

「・・・先輩・・・？」

小さな声で呼びかけてみるけれどまったく反応はなく、

そっと先輩の額に手をあてるとものすごい熱が伝わってきた。

酷い熱だ。

私は急いでリビングに戻つて冷凍庫を開けた。

アイスノンがない。

あー、そうだ・・・。

先輩の部屋にはいろいろ揃つていらないものがあるんだった・・・

。

私は風邪薬が置いてありそうな場所を探した。

だけじやつぱりそんなモノはなく、冷蔵庫の中もほぼ空っぽの状態
だった。

先輩・・・もしかして・・・何も食べてないとか・・・？

・・・ピンポーン・・・

夕方、インターフォンの音で俺は田が覚めた。

・・・誰だ?

ピンポーン・・・

・・・ナル・・・・かな?

いや・・・だけど、ナルなら合鍵を持っているし、

何より・・・昨日からずっと電話に出てくれないから

ここに来るワケがないか・・・。

一昨日のビショヤ降りの雨の中、ずぶ濡れのままナルを追いかけ、

アパートにも行ってみた。

だけどナルはしばらく待つても帰つて来る様子もなく、
彼女が行きそうな場所を全部回り、探し続けた俺は
見事に風邪をひいた。

そして昨日からずっと寝込んでいた。

・・・ピンポーン・・・

しつこいな・・・。

「これは風邪で死にそうだって言ひのこ・・・やつあと帰つてくれ。

ピンポーン・・・

さうに鳴り続けるインターフォン。

だけど俺は起き上がることも出来ないでいた。

かねと傍に置いてある携帯が鳴った。

誰だよ・・・。

ナル専用の着メロじゃないからナルじゃない事だけは確かだ。

「・・・はい、もしもし?」

『あ・・・澄子です・・・。』

澄子ひやん。

「・・・どうしたの?」

『あの・・・今、広瀬さんの部屋の前にいるんですけど・・・』

わざわざからインターフォンを鳴らしてたのは澄子ちゃんだったのか。
。。。

『広瀬さん、風邪だつて聞いたから・・・それで・・・』

「・・・。」

『・・・昨日も休んでたし・・・あの・・・中にいるんですよね?』

開けてもらえませんか?』

「・・・いや・・・、大丈夫だから・・・。」

『昨日、澄子ちゃんを部屋に入れたおかげでナルに誤解させてしまつた・・・。』

止むを得ない理由だったとしてもそれが原因でナルを傷つけてしまつた。

だから俺はもう一度とナル以外の女の子は部屋に入れないとつもりだ。

『・・・広瀬さん・・・』

「『めん・・・澄子ちゃん・・・せつかくなんだけど、

帰つてくれないかな・・・。」

『どうしてですか?』

「・・・これ以上、彼女に誤解されたくないから・・・。」

『・・・。』

「・・・どんな理由があつても・・・澄子ちゃんをもうこの部屋に

入れるワケにはいかないよ・・・。」

『・・・広瀬さん・・・お願ひ、開けて・・・』

「澄子ちゃん・・・ダメだつて・・・。」

『じつじつむ・・・ですか?』

「うそ・・・じつむ。」

じまいへの沈黙の後、

『・・・わかりました・・・今口は、帰ります・・・。』

澄子ちゃんは電話を切った。

その後、俺は携帯を閉じてまた眠りこついた。

ぐれぐらして寝ていたのかわからぬけれど……

後頭部と額に感じる冷たい感触で目が覚めた。

「あ……」めんねむ……起きしきやいました?」

・・ナルの声?

熱のおかげで朦朧とする意識の中、視界にナルの心配そうな顔が入つてきた。

「・・・ナル・・・?」

ここにナルがいるはずがないと思ひながら、

やけにリアルに見えるナルの姿に向かつて呼びかけてみた。

「・・・はい。」

返事をしたナルが俺はまだ幻とも現実とも区別がつかないでいた。

俺はそつと手を伸ばしてナルの頬に触れてみた。

暖かくて、柔らかくて・・・まるで本物のナルに触れているようだ
った。

「・・・先輩？」

ナルは頬に触れている俺の手をぎゅっと握ってくれた。

・・・夢・・・なのか？

「先輩・・・大丈夫ですか？」

ナルは少しだけ俺に顔を近づけた。

それでも・・・まだ夢なのか現実なのかがわからない・・・。

だけど掌に感じているナルの頬の温かさ・・・

それに手の甲に感じているナルの掌の温かさも決して夢なんかじゃない気がした。

夢なら・・・何も感じない・・・。

「ナル・・・来て・・・くれたのか・・・?」

「はい・・・」

本物のナルだ・・・。

「ナル・・・、ごめん・・・俺・・・」

俺は真っ先にナルの誤解を解きたくて、起き上がろうとした。

「先輩、まだ熱があるから……寝てないと……。」

「……いいから……ナル、聞いて？」

「でも……。」

「大丈夫だから……。」

俺がそう言つと、ナルはまだ心配そうな顔をしながら

「わかりました。」

と言つて、俺の体をそつと起こしてくれた。

「一昨日の事なんだけど……。」

「はい……。」

「俺の部屋にいたのは……先生のお嬢さんなんだ。」

「あの飲み会の時に今井先生の隣にいた……澄子さん……？」

「うん……それで、その……澄子ちゃんて将来、先生の跡を継ぐ為に

今、大学の建築学科に通つてゐるんだけど、土曜日と日曜日……課題の資料集めを

手伝つてくれつて頼まれてさ……、けび……俺はナルと会いつたかったし、

別に仕事でもないから断つたんだけど……先生がその会話を隣で聞いてて、

澄子ちゃんを手伝つてやつてくれつて……。」

「……それで……元気……？」

「いや……元気は入れるつもりはなかつたんだけど……、

一昨日、急に雨に降られひやつて一人ともびしき濡れになつたから

澄子ちゃんに風邪をひかせちゃいけないと思つて……それで仕方なく。

……で、先に澄子ちゃんにシャワーを浴びさせた時にナルが来ちゃつて……

「……それじゃあ……」

「……うん……澄子ちゃんとはなんでもなこよ。」

俺がそいつ言った途端、ナルは涙を流して泣き始めた。

「……めんなさい、……めんなさい……」

「なんでナルが謝つてるんだよ……？謝らなきゃいけないのは

俺の方なのに……。」

「……だつて……私が……先輩の、事……ちゃんと、

信じて……なかつたから……」「

「違ひよ……ナルが悪いんぢやない……。」

「……でも……」「

「俺だつて……もし、同じ場面を見たひ……あつと、誤解してた……。」

「……先輩……。」

「先生の命令で仕方なく瀧子ちゃんの手伝いをする事になつたから……。」

それでナルには“仕事”って言つたんだけど……ごめんな。

変に気を回しすぎたせいで……返つて、ナルの事……傷つけた……。

俺がちやんとナルに話してれば・・・ナルを泣かせずに済んだの
に・・・。

ホントに・・・『めんな・・・。』

俺はナルの両手を撫でて泣き止むのを待つた。

「資料集めはもう行かないよ。」

「……でも……澄子さん、やつぱり一人じゃ

大変なんじゃですか？……課題のお手伝いなら……。」

「そんな事ないよ、だいたい課題の資料集めとか言って、

結局あちこち連れ回されただけで、買い物にも付き合はれたり……。」

「ほとんどアートみたいなもんだったんだぞ？」

「で、でーとあ……？」

「そーだよ、だからあんなのもつ手伝わなくていいの。」

「いつちが疲れるだけだよ……。」

「・・・むー・・・ずるい・・・私だつて先輩とデートしたいです。

」

俺と澄子ちゃんがデートしたと聞いて、ナルは口を尖らせた。

そんな顔をするといろが少し子供っぽくてまた可愛い・・・と思つたけど、

“俺とデートしたい”と素直に感情を口にしてくれた事が

俺は嬉しかつた。

「俺だつてナルとデートしたいよ。」

ナルの尖らせた口にキスしようつと俺は顔を近づけた。

「でも、当分はダメです。」

だけどナルは口を尖らせたままブイツと顔を背けた。

「えー、なんで!？」

やば……マジで怒ったのかな……？

「病人だからですよー。」

あ……モードー？

「じゃ、治つたりトートしてくれる？』

「はい、もううんです。』

ナルはにっこり笑った。

「といひで……先輩。』

「ん？」

「おなかすいてませんか？』

「あ……減つてるかも……。』

そういえば、何も食べてないんだつた……。

いつもなら週末、ナルと一緒に買い物に行く。

だけど先週は澄子ちゃんととの“強制デート”があつてナルと会えない
くて

まともに買い物もしていない。

今からナルとメシを食いつに行くにしても

俺はまだ熱で動けそうにないしな・・・。

「先輩、鍋焼きうどんなら食べられそうですか？」

「うん。」

・・・この辺に鍋焼きうどんの店なんてあったっけ・・・？

「じゃあ、出来たら呼びに来ますから、それまで寝ててください。」

ナルはやつと寝室を出て、キッチンへと消えていった。

・・・“出来たら”って・・・ナル、買い物行つて来たのかな？

それにこのアイスノン・・・

しかもおでこに貼つてあるこの冷却シート・・・。

こんな家のなかつたよな・・・？

それから1~5分くらい経つた頃、ナルが寝室に俺を迎えてきた。
ダイニングテーブルの上には鍋焼きうどんが用意してあった。

「ナル・・・買い物行つてきたのか？」

「はい、ついでに先輩の部屋なんにもなかつたから最低限のモノだけですけど、

買つてきました。」

「重くなかつた？」

「大丈夫でしたよ。」

「ごめん・・・いろいろありがとな。」

「・・・だつて、私は先輩の“彼女”ですから。」

ナルはそう言うと少し照れたように笑つた。

「あ・・・そういうば、ナル。」

「はい？」

「今朝、矢野から電話があつた時に聞いたけど、

ナルも昨日、風邪で会社休んだんだろう？

もう大丈夫なのか？」

「昨日の雨の中、俺の部屋を飛び出した後、

ナルはしばらく待つてもアパートへは戻つてこなかつた。

多分ずっと外にいて、その時に風邪ひいたんだわ。

「あ、私の方はたいした事なかつたですし、

昨日一畠寝てたらすっかり治りました。」

「そつか、それならよかつた。」

考えてみればたいした事あつたら俺のところに

こうして来てるはずいないか・・・。

“最低限のモノ”・・・ナルはそう言つたけど、

家の中にはなんだかいろいろと増えていた。

わづきのアイスノンといい、冷却シートといい、

そして今、目の前にある風邪薬。

食事が終わった後、水と一緒にナルが出してくれた。

「…………」さういふことを冷蔵庫を開けたら、ポカリまであった。

しかも一リットルサイズのが。

鍋焼きうどんの材料といふ……

絶対これ一往復くらいしてゐるだろ……。

その日の夜、ナルは俺の部屋に泊まった。

夜中に何度も起きて俺の布団を掛け直してくれたり、アイスノンや冷却シートを取り替えてくれたりした。

「…………」数年は風邪なんてひく」ともなかつたし、

ナルが来てくれるまで死にそうだつたけど……

たまには風邪をひいて熱を出すのも悪くない……と思つた。

・・・だって・・・ナルがいろいろ世話を焼いてくれるから。

ナルの方は大変なんだろうけど。

ちなみに、ナルは付き合い始めてから毎週末、俺の部屋に泊まっているから急に泊まることになつても困らなかつたりする。

・・・て、言づか・・・俺達・・・別々に暮らす意味つてあるのか？

俺は常にナルと一緒にいたいと思つていてる・・・

日曜日の夜、ナルをアパートまで送つて一人でこの部屋に

帰つて来る時なんてものすゞしく寂しいと感じるもんなあ・・・。

ナルは・・・どう思つてゐるのかな・・・？

翌日、先輩は熱も下がり、朝食も普通に食べた。

だけど本当なら今日一日、まだ寝ていた方がいい気がするけど、

一日も会社を休んだし、もう大丈夫だからと

私と一緒に部屋を出て、車で私を会社まで送ってくれた。

私の会社と先輩の会社は近いけれど、

「ひして一緒に出勤するのは初めてだ。

会社の前で先輩の車から降り、手を振つて見送つていると

運悪く、智子に見つかってしまった。

「おはよう、愛美ー」

なんだかにぎにぎしている・・・。

あつと、私が車から降りたあたりからずっと見ていたのだろう・・・。

「お、おはよ。」

「朝から仲良ぐ」出勤?」

「今日はまたまよ。」

「ふーん……て事は昨日、彼の部屋に泊まつたんだ?」

「ん……まあ……風邪で寝込んでたから……。」

「あ……、愛美が月曜日休んでたのって……。」

実は彼に風邪うつされたの?」

「え……ひー?違つよ。」

別々で風邪ひきマシタ……。

「別に隠す」トないの?」

「いや……ホント?……違つから。」

「ふーん……まあ、どうでもいいけど。」

智子はやつぱりとやつと更衣室へと入っていった。

まあ・・・相手は智子だし、別に全力で否定するのもないけれど。

智子の後に続いて更衣室に入ると佐伯さんと鉢合せになつた。

朝から嫌な相手に会つちゃつたな・・・と思いつつ、

私が「おはようございます。」とやつと、

佐伯さんは無言で私を睨みつけ、更衣室を出て行つた。

「何よ、あれ・・・。」

少し呆気に取られている私のかわりに口を開いたのは智子だった。

佐伯さんは康成さんと婚約を発表してから休憩室や更衣室で偶然会つても、

まるで勝ち誇ったような顔で私を見ていた。

だけど、私はもう康成さんの事は好きじゃなくなっていたし、
なにより、先輩と一緒にいられる事の方が幸せだから別に氣にも留
めていなかった。

でも・・・なんだか今日の彼女は違っていた。

康成さんとケンカでもしたのかな？

・・・けど、それなら私は関係ないの。」。

私は訳がわからないままだつたけれど、特に氣にする必要もないと思
い、

この一件は頭から離れていた。

そして週末、金曜日。

いつもなら仕事が終わってから先輩と一緒に買い物をして

マンションに帰る。

だけど先週は“休日出勤”になつたと言われ、
結局、自分の部屋に帰つた。

今週は・・・どうなるのかな・・・?

先輩はもう“資料集め”は手伝わない・・・とは言つていたけれど、
やつぱり今井先生のお嬢さんだし・・・手伝つことになる気がして
いた。

定時を少し過ぎ、更衣室で私服に着替え終わると携帯が鳴つた。

先輩からだ。

「もしもし。」

『もしもし、今どきへ。』

「会社です。」

『まだ仕事してた?』

『いえ、ちよつと着替え終わって出るところでした。』

『そつか、ちよつとよかつた。俺も今、仕事終わったところだから、

ナルの会社に迎えに行くよ。』

『はい、わかりました。』

先輩が迎えに来てくれる・・・と叫びながら

土田は一緒に過ぐせるかと思つかなかな?

10分後、先輩が車で会社の前まで来てくれた。

「先輩、お仕事終わるの早かつたんですね？」

「うん、先週ナルとゆっくりできなかつた分、早く終わらせて

早く会いたかつたから。」

「あ、でも・・・あの・・・先輩、明日は・・・大丈夫なんですか？」

「明日？」

「・・・澄子さんの資料集め・・・とか。」

「あー、それなら大丈夫だよ。」

先輩は心配ないと言つた感じで小さく笑つた。

「確かに澄子ちゃんからまた土田に資料集め手伝つて欲しいって言
われたけどね。」

「あ・・・じや、それならー・・・」

「けど、先週マークしてたおかげでほとんどの資料が集まつてないの
を見て、

先生が怒っちゃつてね。」

「先輩ですか？」

「いや、澄子ちゃんを。・・・ちゃんと真面目に資料集めしていない
から、

何の為に休みの日にまで俺を無理に付き合わせたのか・・・。
だからもう手伝わなくていいって先生からも言われたし。」

「そうですか。」

「そんな事より、今日は久しぶりにナルのコロッケ食べたいなー?」

子供がお母さんに夕食のメニューをおねだりするみたいに

先輩は私の顔を覗き込んだ。

“自称・三流シェフ”・・・だけど先輩は私が作るものを見つも

「おいしいよ。」って笑って食べてくれる。

「じゃあ、頑張って作ります。」

私がにっこり笑って返事をすると先輩は嬉しそうな顔をして

いつも一緒に街行くスーパーに向かってハンドルを切った。

買い物を済ませて先輩のマンションに戻ると、

先輩の部屋の前に人影が見えた。

女人の人・・・あれは・・・

澄子さん・・・？

「澄子ちゃん……っ！？」

ナルと一緒に夕食の買い物を済ませ、俺のマンションに戻ると

澄子ちゃんが部屋の前に立っていた。

「・・・千秋さん・・・？」

澄子ちゃんは俺の隣にいるナルに視線を向けた。

「どうして千秋さんが広瀬さんと一緒にいるんですか？」

彼女が少し強い口調でそう言つて、繋いでいた手から力が抜けたナルは

ほんの少しだけ後退りした。

「俺の彼女だから。」

俺はナルの手をぎゅっと握った。

「・・・。」

澄子ちゃんは驚いた表情のまま、今度は俺に視線を移した。

「澄子ちゃん・・・ビビリでしょ。」

なんとなく理由はわかつてこるけれど・・・。

「・・・明日・・・ビビリでもダメですか・・・?」

・・・やつぱり・・・あの事か。

「今井先生にも言われただろ?」

「明日はちゃんと資料集めに専念しますから・・・つー。」

「一人でできない事ないだろ?」

「でも……一人だと……」

「だったら同じ大学の子と協力してやれば?」

「私……、広瀬さんに手伝つてもらいたいんですつ。」

「悪いけど……無理だよ、手伝えない。」

「パパに言われたからですか?」

「違うよ……例え先生にまた命令されたとしても俺は断つてた。」

「じゃあ……どうして……?」

「彼女との時間を大切にしたいから。」

「それなら……せめて土曜日か日曜日のどちらかだけでも……」

「ダメ。」

「……。」

「とにかく……俺が手伝うことはできないから。」

そう言い放ち、俺はナルの手をひいて澄子ちゃんの横を通り過ぎた。

部屋の鍵を開けて、先にナルを入れてから俺も部屋に入ろうとした時、

澄子ちゃんが泣き出した。

「・・・せ、先輩・・・。」

ナルにも澄子ちゃんの泣き声が聞こえたらしく、

不安そうな顔で俺を見上げていた。

俺は澄子ちゃんを振り返ることもせずドアを閉めた。

「先輩・・・澄子さん、放つておいていいんですか?」

「いいよ、俺が行つてもしてやれる事は何もない。」

「でも・・・」

「それに今、俺が行けばナルを放つておく事になる。」

ナルはそれでもいいの・・・?」

「それは・・・」

いいわけないよな?

「・・・ 例え、ナルがそれでいいって言つても俺は嫌だから。」

ナルの事だから無理してそれでも行ってやれと言つかもしれない・・

そう思つた俺はナルの口が開く前に言つた。

そして俺がリビングに入つてもナルはまだ外の様子をなんとなく気にして

玄関に立つたままだつた。

「おいで・・・ナル。」

「・・・はい。」

俺が呼ぶとナルはやつとリビングに入つてきた。

「澄子ちゃんてさ、一人っ子で甘やかされて育ってきた所為か、何でも自分の思い通りにならないと気が済まない性格なんだよ。」

実はスーパーでナルと買い物をしている時

澄子ちゃんから携帯に電話があった。

マナーモードにして出なかつたからナルには気付かれなかつたけど。

「今朝も散々、先生に叱られて俺も何度も断つたのに・・・。」

「そりなんですか・・・。」

「それより、ナル、何からすればいい? ジャガイモの皮むき?。」

「え・・・? あ、はい。」

買い物袋から「ロッケの材料を出し、ナルと一緒に夕食作り。

これがまた楽しかつたりする。

ナルは以前、“自称・三流シェフ”だとか言ってたけど、
実は全然そんな事はない。

味はもちろんな、手際だつていい。

手が込んだ物は無理です・・・と、この間も胸を張つて言つていた
けど、

レパートリーは少なくない方だと思つ。

「できたーっ！」

「んー、つまそーー！」

揚げたてのコロッケと野菜スープ、ほかほかの炊き立てご飯と

冷蔵庫から冷やしておいたサラダを出してテーブルに並べた。

まさしく“幸せ家族の食卓の図”。

「「こただきまーすー。」」

「ロッケを一口食べると中からほくほくと湯気があがった。

「おこしーー。」

「ホントですか?」

「うそ、やっぱナルのロッケ最高ー。」

「えへへ、そいつでもういえると嬉しいです。」

ナルは少し照れながら嬉しそうに笑った。

最高なのはロッケだけじゃないんだけじな。

あんまり褒めるとナルの場合、真っ赤になつて俯いてしゃべりなくなるし。

照れながら嬉しそうに笑つ顔がすゞく可愛いから、

褒めるのはとりあえずこれくらいにしておく。

付き合い始めて2ヶ月田で覚えた“小技”・・・だつたりなんかす

る。

月曜日、夕方。

もう少しで定時という時、携帯にメールが届いた。

仕事中は一応、マナーモードにしているから

携帯がブルブルと震えるだけで着信音は鳴らない。

先輩かな・・・？

そう思い、メールを開くと・・・

意外な人物からだった。

- - - -

話したい事がある。

『Aruru』で待ってるから

仕事が終わったら来てほしい。

- - - - -

康成さんからだった。

話って・・・何?

今さらなんの話があるひついつの?

私は康成さんの話なんて聞くつもつも『A r u r u』に行くつもつもなかつた。

もちろん・・・その事を伝えようとメールを返すつもつもない。

それから、次の日もまた次の日も康成さんからメールが来た。

だけど私はそれでもメールを返さないでいた。

そして木曜日、仕事が終わって更衣室で着替えていると携帯が鳴つた。

着信表示を見ると康成さんからだつた。

出たほうがいいのかな？

月曜日からずっとメールしてきているし、

何かよっぽど重要な用なのかもしれない・・・。

思い切って出てみよつと思い、携帯の通話ボタンを押そうとした時、更衣室に佐伯さんが入つてきた。

私は思わず携帯の終了ボタンを押して電話を切つた。

それを見た佐伯さんは無言で私を睨みつけた。

何なの 一体・・・。

気分を害したまま更衣室を出で、帰宅しようと会社を出ると

いきなり後ろから誰かに腕を掴まれた。

「つー?」

誰つ?

振り向いて見ると、康成さんだった。

「「めん・・・驚かせて。」

もしかして・・・待ち伏せしてた?

「話があるんだ。」

「・・・。」

私は、どうしようか迷った。

別に今やから康成さんの話を聞くつもりもないし、聞いたところで何が変わるわけでもないだろう。だけど、何度もメールが来て電話がかかって来ていつもして待ち伏せますといつ事は・・・

聞くだけでも聞いたほうがいいんだろうか？

それとも・・・

「康成さん。」

不意に康成さんの後ろから声がした。

康成さんはその声に振り向くと少し眉を顰めた。

・・・佐伯さんだった。

康成さんの手から力が抜け、私は掴まれていた腕を離して咄嗟に無言で踵を返した。

「・・・愛美つ！」

「康成さんつ。」

康成さんが私を追いかけようとした瞬間、

佐伯さんがそれを制した。

後ろで一人の声が聞こえる。

ケンカしているみたいだ。

康成さんと佐伯さん・・・上手くいってないのかな？

でも、婚約までしてるんだし・・・

・・・て、別に私が気にすることじやないか。

翌日、金曜日。

いつもなら仕事が終わると先輩の部屋に行くんだけれど、

今田は出張で先輩はいない。

明日の夜に帰つてくる予定だ。

だから私は自分のアパートに帰る事にした。

電車に乗つて外の風景を眺めていると先輩のマンションが見えた。

・・・早く会いたいな・・・。

本當は先輩と毎日でも会いたい。

康成さんと付き合つていた時はそんな事思わなかつたのに・・・。

でもそれは会社が同じだから顔だけでも見よつと思えば

見ることができたからかもしれないけど。

先輩、早く帰つてこないかなあ・・・。

明日何時に帰つてくるのかな?

アパートに着いて、2階にある自分の部屋へと繋がっている階段をあがると人影が見えた。

黒っぽいスーツを着た長身の男性だ。

しかも、その男性は私の部屋の前にいる。

・・・誰?

私はゆっくりと男性に近づいた。

「・・・康成さん。」

私の部屋の前にいたのは康成さんだった。

「愛美。」

康成さんは私に気がつくと、立ち止まってしまった私に近づいてきた。

「じつしても話がしたくて……。」

「じつしても？」

「愛美……もう一度、俺とやり直してくれないか……？」

「……何を言っているの……？」

「あいつ……嘘だつたんだ……。」

・・・嘘？

「どうして…・・・事…」

「千鶴のヤツ…・・・妊娠なんてしていなかつたんだ。」

「え…・・・？」

「それって…・・・」

「子供なんて出来てなかつたんだよ。」

「アイツ……どうしても俺と結婚したいからって、嘘ついてたんだ……。」

「…………」

「俺は、愛美と結婚するつもりだったのに……。」

「…………でも……、佐伯さんとも付き合っていたのは、

事実……でしょ？」

「股かけてた事には変わりはない。」

「それは……つ一向こつから誘つてきたから……。」

「だからっ！」

「愛美は知らないかもしないけど……アイツ……、

「つちの社長の娘なんだ。」

「えつ！？・・・で、でも・・・苗字が・・・」

「社長は数年前に離婚して千鶴は奥さんの方に引き取られたから、

奥さんの旧姓を名乗つてゐるらしい。」

「・・・。」

「俺は今の会社に骨を埋めるつもりだったし、

一回だけのつもりだった・・・だけど・・・。」

・・・何、それ・・・。

「・・・つまり・・・齎されてたって事?」

「ああ・・・。」

だとしても・・・

「アイツとは、婚約を解消して別れたよ。」

「え・・・。」

「子供ができたからって言われて仕方なく結婚するつもりでいたけど、

妊娠してないってわかった今・・・もう、アイツと一緒にいたいとは思わない。」

「そんな・・・」

「俺にて難儀だが、子供に

今さらそんな事を言われても・・・

「俺といつこじてられ。」

「・・・・・満瀬。」

「・・・・・な。」

「なまつて・・・それは・・・

「俺がいるから。」

私は後ろから聞こえた声にハツとして振り返った。

「先輩つ！？」

・・・ぢひして・・・・?

先輩は康成さんの前に来ると私を背中に隠し、

「今、ナルと付き合ひてるのは俺だから。」

と、言い放つた。

「・・・・。」

康成さんは押し黙り、そしてしばりくの間、

先輩から視線を外さないでいた。

先輩の方も目を逸らそうとしない。

ピンと張り詰めた空気・・・どれくらいその緊迫した状態が続いたかはわからないけれど康成さんは私に視線を移した後、先輩と私の横を通り過ぎて行った。

「ナル、大丈夫だった？」

康成さんの姿が見えなくなつた後、先輩が心配そうな顔をして

私の顔を覗き込んだ。

「は、はい。」

「何も・・・されてないよな？」

「だ、大丈夫です・・・て、先輩・・・なんでここにいるんですか

？」

出張に行ってゐる感じ……。

「あー、仕事が予定より一日早く終わったから、

驚かせないと想つて連絡しないで迎えに来たんだ。

「そうだったんですね。」

「けど、逆にこいつが驚かされたな。

・・・まさか、元彼がまだナルにちょつかいで出てたなんて。」

「・・・。」

「・・・とかく・・・無事でよいかつた・・・。」

「先輩、ありがとうございました。」

「彼氏なんだから当たり前だろ?」

先輩はプツと吹き出して私の頭を優しく撫でてくれた。

「じまじまへへ…俺のマンションにいた方がいいな。」

先輩の車でマンションに向かう途中、

少しの間、何かを考えているようだった先輩が

不意に口を開いた。

「どうしてですか?」

「あの様子じや、またナルの部屋に押しかけてくるだ?」

「・・・。」

「・・・かと言つて、俺がナルの部屋にしづらへーのとじても

帰りが遅いときもあるし。」

「で、でも・・・先輩・・・迷惑じやないですか?」

「もつひー!何言つてんだよつ。」

「だ、だつて・・・」

「自分の彼女を他の男から守るのに何が迷惑なんだよ?」

それとも、ナルは元彼のトコに戻りたいのか?」

「やんなワケなこじやなこですか。」

「えい、おとなじへ俺のまへんを畠やなれこ。」

「え、せこ・・・。」

結局、私は先輩のまへんをつまむへ先輩のマンションで

暮らすことになった。

そして、週が明けた日曜日。

朝一で私は部屋に飛び出してしまった。

「ただいま。」

週明け、月曜日。

俺はいつもより早めに仕事を切り上げた。

少しでも早く帰つてナルの顔が見たかったからだ。

だけどドアを開けた瞬間、笑顔で出迎えてくれると

思つていたナルの姿はなく、シン・・・と静まり返つた

暗い室内が視界に入つてきた。

・・・あれ？

「ナル・・・？」

リビングのドアを開けてナルの名前を呼んでも返事はなく、

おまけに部屋の中は真つ暗だ。

もしかして、もひ寝たとか？

いやいや、まだ8時前だぞ？

それでも一応、具合でも悪くてベッドの中にこらのかと寝室を覗いてみた。

「・・・あれ？」

寝室にもいない。

・・・とこいつ事は・・・風呂か？

だけけど音も聞こえないし、相変わらずどいつも真つ暗なままだ。

まだ帰っていないのかな？

それとも、もしかして・・・こいつもの癖でアパートに帰つてるとか？

だとすると・・・またあの男が来たらマズいな・・・。

俺は聊か不安になり、携帯を開いた。

ナルの携帯を鳴らしてみるけれど、なかなか出ない。

まさか・・・

本当にあの男が来てて、出るに出れないとか・・・？

そう思つてみると、留守番電話に切り替わる寸前、

電話越しにナルの声が聞こえた。

『もしもし、先輩？』

「うん、俺。」

『「」めんなさい、なかなか出られなくて。』

「いや、それはここんだけビ・・・もしかして、まだ仕事してた?」

『お詫びの回』から何やら騒がしい声がして、

それはやがてまだ会社にいるんだとわかった。

『あ、はい。』

「あー、じめん。それなら、いいんだ。」

『何か急ぎの用でした?』

「ん・・・じゃなくて、まだ帰つてなかつたから、

まさかアパートに帰つてまた元彼に捕まつてゐるのかと思つて。』

『あ・・・めんない、心配かけて・・・』

「いや、そんな気にしなくていいよ。」

ナル・・・忙しそうだなあ。

なんかトラブルでもあったのかな?

いつもよつやや早口でしゃべっているナルの様子で
それは感じ取ることができた。

『あ、あの・・・それと先輩、私、今日はまだ帰れそうにないので

『晩御飯は先に済ませちゃってください。』

「そつか・・・わかった。」

電話を切った後、俺はふとナルは晩メシはどうするのかと

聞いていない事に気がついた。

わい一回電話するのもなんだしなあ・・・

何時くらいになつたうだとも言つてなかつたし、

同僚といでに済ませて帰るかもしれないしなあ・・・。

・・・とつあえず野菜スープでも作るか。

スープなら遅くなつてあまり食べる気がしなくても食べられるだろう。

それから俺は先に晩メシを済ませ、風呂に入った。

風呂から上がり時計を見ると、時間はすでに10時を回っていた。

ナル遅いな・・・。

会社まで迎えに行こうかどうか・・・・、

今から行つたとしてももう会社を出でて行き違ひになるかもしない。

かといって、電話して聞くのもな・・・。

まだ仕事中つて事も有り得るし・・・。

さて、ビーしたもんかと俺が考えていると玄関のドアが開く音がした。

「ただいまでーす。」

あ・・・帰つてきた。

「おかえり・・・で、あれ?」

「よっ。」

ナルの隣にはなぜか矢野もいた。

・・・?

「あ、先輩、遅くなつたから矢野さんがわざわざ送つてくれた
んですよ。

・・・それでー、せつかくなんで少し寄つて行つてもうおつかと
思つて。」

あ、なるほど。

「そつか、まあ上がれよ。」

「お邪魔しまつす。」

「ナルと矢野はもつメシ食つたの?」

「いや、まだ。」

「まだですー。」

「じゃあ、なんか作るから矢野も食つて行けよ。」

その後、送つていくから。」

「こんな時間まで何も食べないでやつてたのか。

「ん？ ああ、 そうだな。 じゃあお言葉に甘えて。」

「ナルは先に着替えて来いよ。 その間に作るから。」

「え？ はい。」

「随分忙しかったみたいだけど、 なんかあつたのか？」

ナルが着替えを済ませ、 リビングに戻ってきたところで俺は一人に
聞いた。

「なんかあつたどこの騒ぎじゃねえよー。」

矢野が疲れた様子で言った。

「あ、あのー···それがですね···」

ナルはなんだか何か言いつらひつい口を開いた。

「会社···クビになっちゃいました···。」

···え?

「それって……どういう事なんだよ?」

俺は交互に一人の顔を見た。

「俺にもさっぱりわからん。」

矢野はやがて手を上げ……と言った感じで

首を横に振った。

「ナル……なんかやつたの?」

「い、いえ……何も……。」

「……じゃ……なんで?」

「……なんでナルが……?」

「あ・・・でも、だいたい察しつこいので・・・」

「愛美ひやさん、心当たつあるの?」

「・・・はい。わざわざ来て矢野さんにもまだお話ししてなかつたんですけど、

多分、康成さんと佐伯さんの事が原因じやないかと・・・。」

「田高と佐伯さんか?」

「はい、康成さんと佐伯さん・・・なんだか上手くいってないみたいで・・・。」

「それがなんで愛美ひやさんに関係あるの?」

「・・・それがですね・・・実は先週の月曜日からずっと2・3日続けて

康成さんからメールが来てたんです。」

「日高から? なんでまた?」

「話があるって・・・、でも、私はもう康成さんの話を聞くつもりも
会うつもりもなかつたからずっと無視してたんですけど、
木曜日、会社の前で捕まっちゃって・・・で、その時に佐伯さんが
現れて、康成さんとケンカになつて・・・」

「・・・で、愛美ちゃんはどうしたの?」

「私はその場にいても一人の問題だから関係ないし、

さつさと帰りました。そしたら金曜日の夜に今度はアパートで

康成さんに待ち伏せされてて・・・。」

「それで、愛美ちゃん大丈夫だったの？」

「はい、ちょうどその時、先輩が来ててくれたので大丈夫でした。」

「そか・・・て、だから愛美ちゃん広瀬の部屋に帰るって言つたんだ？」

「はい。」

「じゃ・・・ナルにちよつかい出してたのは金曜日だけじゃなかつたんだ？」

今の話の流れで行くと・・・“日向”と言つ男がナルの元彼で、

“佐伯”って女がその浮氣相手だったヤツか・・・。

「はい・・・無視してれば大丈夫だろ」と思つて

先輩には何も言わなかつたんですけど・・・

「そつか・・・で、その日高つてヤツはナルになんの話があつたんだ？」

金曜日の夜、日高つて男がナルに言い寄つてたのが日に入つてきて、

俺は咄嗟に割つて入つたけど、詳しい話までは知らない。

だいたいの予想はついているけど・・・。

「それが・・・佐伯さん、子供ができたつて言つてたの嘘だつたら
しいんです。」

「「えつー?」

「康成さんと結婚しても結婚したくて嘘ついたそなんです。」

「「はあー？」」

「・・・で、康成さんが佐伯さんと婚約解消して別れたから
やつ直やつひて・・・」

「田高も田高なら、佐伯さんも佐伯さんだな・・・。」

矢野は呆れた口調で呟いた。

まったくもってその通りだ。

「・・・けど、だつだらなんでナルがクビになるんだ？」

「あ・・・つーべつだよ~。」

「それがですね・・・佐伯をみて実は、つかの社長のお嬢をそりし
いんです。」

「え・・・でも、苗が違つじやん?」

「私も康成さんから聞いただけなんですねけど、数年前、社長が離婚
した時に

佐伯さんは奥さんの方に引き取られたみたいで、

その奥さんの姓を名乗つてゐるやうなんです。」

「なるほどね・・・。」

「だから、今回の事件おなじく佐伯さんが手を回したんじゃない
か。」

「確かに・・・田高も来週から突然、北海道に転勤になつたつて辞令が出てたな。

・・・だとすると、佐伯さんは田高を北海道に飛ばしただけじゃ気が済まず、

愛美ちゃんをクジにしたつてつけか・・・。」

「はい・・・多分。」

それで今日、仕事の引継ぎなんかでずっと遅くまでやつてたのか・・・。

てか、田高ってヤツもあの女もナルと同じ会社だったのかよつ。

「それって・・・思つたり不当解雇じゃないか?」

「ああ、やつだな。」

「あ・・・でも、もうここですよ。」

「「なんで?」」

「これでもう明日から康成さんと佐伯さんの顔見なくて済みますし。」

」

ナルは意外にもスッキリとした顔をしていた。

それでも俺は納得なんてしていないけど・・・。

もちろん矢野だつて複雑な顔をしていた。

翌日、火曜日。

朝、俺が家を出る時間に合わせてナルが朝食を作ってくれた。

出勤する時も玄関でナルのおでこに軽くキスをして

「行ってくるよ。」って俺が言つたら、

にこり笑つて「いつてらっしゃい。」と見送つてくれた。

まるで新婚みてー。

俺は仕事をしながらにやけそつになる顔を抑えるのに苦労した。

ちよつと氣を抜けばすぐに顔が緩みっぱなしになる氣がしたからだ。

昨夜はナルの“突然クビ事件”に驚いたけど、

こんな生活が待つてゐるなり、まんざらクビになつたことも悪くないように思える。

別にこのままナルが働かなくても、ナル一人くらい十分食させていける。

なんならいつそこの流れに乗って、プロポーズまでしようかとも

一瞬・・・いや、思いつきり考えた。

だけど、それじゃきっとナルは納得しないだろう。

それに、ナルは「今日からまた大学時代に戻つたつもりで就活です
っ！」

と、両手で握り拳まで作つて張り切つていたし・・・。

俺つて・・・焦りすぎなのかな・・・？

それから数日後　　。

俺と今井先生、澄子ちゃんの三人はナルの会社・・・

もとい、元会社へ行つた。

矢野との打ち合わせの為だ。

本当は昨日行つ予定だつたけど、矢野曰く、

「愛美ちゃんがいなくなつて、営業部がつまづまわつてなくて・・・」

「・・・と、そんなワケで打ち合わせで使う資料やデータ、見積もりなんかが

まったく準備できてなかつたらしく今日になつた。

もちろん、そんな事はあくまでそれは矢野の会社側の事情であつて

ビジネスとして俺達には関係はない。

だけど、とりあえず俺は矢野の望み通り予定をずらした。

コイツにはいろいろと“借り”もあることだし・・・。

ナルの元会社に着いて矢野を呼び出してもう為

受付に行くと“あの女”がいた。

ナルから口高つてヤツを奪い、そしてナルをクビにした張本人・・・

確か、佐伯とか言つたな。

「『今井建築事務所』の広瀬ですが、営業一課の矢野さんをお願いします。」

「…………はい、恐まりました。

あちらでお待ちになつてください。」

佐伯は俺の顔を見ると、少し顔を引き攣らせたが、仕事で来たとわかるとすぐに作り笑顔で対応した。

ナルの仕返しに来たとでも思ったのか・・・?

佐伯に案内され、俺達はミーティングルームに通された。

ガラス張りのその部屋からは営業部の様子がよく見える。みんな慌しく動いていて忙しそうだ。

矢野は電話で話しながら、パソコンを操作して書類を書いている。

隣のデスクの上には書類が山積みになつてているものの、

誰かが座っている様子もない。

離席という訳でもなさそうだ。

もしかして、あそこにはナルが座っていたのかな？

あ～あ～ナルがクビになつていなければ、制服姿が押めたのに。
・・。

そんな事を思つていると電話を終え、受話器を置いて急いでやつて来る

矢野の姿が目に入った。

「すみません、お待たせして・・・。」

矢野は少し疲れた様子でミーティングルームに入ってきた。

おこおい・・・まだ午前中なのにもう疲れてんのかよ・・・。

「では、始めましょうか。」

そう言ったわりに矢野はいろいろと資料を忘れていた。

頭の中がとつ散らかってんのか、途中で何度もデスクに資料を取りに行き、バタついていた。

しかも見積書も数箇所間違っていたし・・・。

おかげで1時間で済むと思っていた打ち合わせは2時間もかかってしまった。

打ち合わせが終わると、ちょうど午の1~2時だった。

矢野と俺達3人はついでに昼メシも一緒に食べる事になった。

「そういえば今日、千秋さんは？」

ミーティングルームから見える営業一課のデスクに

ナルの姿がないのを今井先生は不審に思つたらしい。

「あ・・・ええつと・・・彼女は先日退職しまして・・・。」

矢野は少し言ひついで口を開いた。

「えつ！？ 辞めちゃつたの？」

「・・・はい。」

「なんだ・・・それで二二二・三日、電話しても別の人が出でたのか。」

今井先生はよく営業一課に電話している。

ナルが辞める前は営業一課にかかってきた電話はほとんど

ナルがとつていたらしく、以前、俺達の接待に同席していたナルは

明るくて愛想もいいから今井先生にもすっかり気に入られた。

だから今井先生とも仕事がらみだけじよく電話でしゃべつていた。

「もしかして・・・広瀬、結婚するのか？」

先生は俺に視線を向けると「やりと笑った。

「ち、違いますよ。」

それならどうなんにいいか・・・。

ちなみに先生は澄子ちゃんと俺の“強制デート”的一件で

俺の彼女がナルだという事をすでに知っている。

「なんだ・・・違つか。」

「ついでに結婚すればいいじゃないか。」

俺の後ろにいた矢野が少し笑いながら言つた。

「そうだよ。」

右隣にいる今井先生まで笑いながら横目で俺を見た。

俺だつてしたいよ・・・。

「俺だけその気でも・・・」

「お前、プロポーズ断られたのか?」

今井先生と矢野は同時に同じ事を言つた。

「いや・・・てゆーか・・・まだしてない・・・。」

「なんで?」

後ろを歩いていた矢野が俺の左隣に並んだ。

「なんでって……今、そんな話してもナルはまた就職する気満々だし……」

「愛美ちゃんはまだ仕事していいたって？」

「いや、そんな事は言つてないけど……」

「んじゃ、なんだよ？」

「今、プロポーズなんかしたら退職したつて言つたみたいで嫌だろ？」

「そんなの気にしてたらいつまでたつても結婚できなーぞ？」

右隣から少し呆れた声が聞こえた。

「お前は昔から詰めが甘いといつか・・・後一步が及ばないといつか・・・」

左隣からもため息交じりの声が聞こえた。

俺つてそんなに煮え切らない男なんだろうか・・・?

それから数日間、俺はナルに結婚の話を切り出そうか
どうじよつか迷っていた。

今井先生と矢野は結婚の話を出してナルの反応を伺つてみれば？

・・・なんて、軽く言つていたけど・・・

俺的には結婚話を持ち出してナルが無反応だったりなんかしたら

立ち直れるかどうか・・・。

まあ・・・でも、結婚の“け”の字くらつ出してみるのも

いいかもしね。

「ただいま。」

「おかえりなさい。」

夜8時過ぎ、いつものように帰宅した俺をナルはいつものように

笑顔で出迎えてくれた。

そして、いつものように温かいごはんを用意してくれている。

けど・・・一つだけ違う事があった。

それは、大きなバッグが寝室の隅に置かれている事。

その大きなバッグは2週間前、旦高からナルを遠ざける為に俺の部屋に移つて来る時にとりあえずの荷物を持って来た時のものだ。

なんでもまたこのバッグがここに出してあるんだ?

ここに来てからずっとクローゼットに仕舞つてあったのに。

スーツから部屋着に着替え、キッチンに行くとナルは味噌汁を温めなおしていた。

「なあ、ナル・・・なんで、またあのバッグ出してんだ?」

「え?」

「ナルがここに移つてくる時に持つて来たヤツ。」

「あー、あれですかー。実は後で先輩に話そつと聞いてたんです。」

「ん? 何?」

「たいした事じゃないんですけど、

「そりそろ自分のアパートに帰らひつと思つて・・・」

「えつー!?」

おこつ。

十分、たいした事だらつ。

「康成さんも北海道に行つた事ですし、さすがにもう私のアパートには

来ないと思つので。」

「ちよ・・・ナル・・・・。」

「それにこれ以上、先輩に迷惑かけられませんからー。」

ナルはそう言いながら、笑顔で俺の目の前におかずを並べていった。

てか、迷惑つて・・・。

「明日、お前にアパートに帰ります。」

「いや……ナル……あの……」

「あ、先輩、晩御飯ならちゃんと冷凍庫に入れて解凍だけすれば食べられるようにしておきますから心配しないで下をこね?」

「あ……ヒ、その……」

「もうだつ、スープも作つておきましょ?」

「……いや、だから……その……」

「先輩、早く食べないと冷めちゃいますよ?」

「あ、うん……て、そんな事より……ナル。」

「はい？」

「あのう……」

「あ……つー?」

「お……よつやく、俺の言いたい事に気付いてくれたか?」

「お箸出してなかつたですね。」

「……。」

「はい、先輩。」

ナルはにっこり笑つて俺に箸を差し出した。

「あ、ありがとう・・・。」

俺は箸を受け取り、小さくため息をついた。

「・・・ナル、ホントに帰るつもりなのか?」

「はい。」

ナルは俺の目の前に座りながら即答した。

「・・・俺がずっとここにいて欲しいって言つても?」

「え・・・。」

「俺は、ナルにずっと居て欲しい。・・・ナルは・・・嫌?」

「いや、そんな事ないですか。」

「じゃ、何がいいですか？」

「で、でも……迷惑じゃないですか？」

「なんで？」

「だって我还是仕事見つけてないですし、ただの面倒ですよ？」

「そんな事ないだろ？」

「だって毎日朝と晩にやること、飯を用意してくれるし、

洗濯、掃除、結局ナルに任せとなつてこる。

俺がしなくてもいいこつて言つてもやつさうしてゐるもんなあ。
・・。

これでナルが居候と言つなり中の主婦達全員居候だろ。

「迷惑だったら、ずっと居て欲しいなんて言わないよ。」

「は、はい・・・。」

「週末、ナルのアパートから本格的に荷物を移そつ。

一遍には出来なくとも、今月いっぱいでアパートを引き払えるだ
るつ?」

「はい。」

俺はナルが少し嬉しそうに返事をしたのを見て、正直ホッとした。

焦る事はないのかもしない・・・。

ここで焦つて結婚話を口にしなくてもナルも俺と一緒に居たいと思つてくれているなら・・・。

次の日から私は、先輩の部屋にいよいよ本格的にパラサイトする事になった。

先輩は全然迷惑じやないと黙ってくれたけれど・・・でも、やつぱり、どこか気が引ける。

朝、6時。

私と先輩はまだ夢の中にいた。

しかし、けたたましい着信音に私と先輩は起こされた。

心地良い夢から現実へと引き戻したのは先輩の携帯だった。

「はい・・・もしもし?」

先輩は寝ているところを起こされたからか、不機嫌そうな声で電話に出た。

そしてベッドから出ると、私に気を使つてそのまま寝室を出で

リビングの方へと行った。

しばらくして、寝室に戻ってきた先輩は少し焦った様子だった。
私がどうしたんですか?と聞くと、何やら仕事でトラブルが起きた
らしく、

今からすぐ大阪に行くと言つた。

「先輩、何泊するんですか?」

「んー・・・、多分3泊は確実かも。」

「あ・・・じゃ、着替えとか多めに入れおきますね。」

先輩が身支度している間、私は先輩の荷物を用意した。

「悪いな、ナル・・・こんな朝早くから支度まで手伝わせて。」

「気にしないで下さい。」

そう言つて私が先輩に笑顔を向けると先輩も「ありがとうございます。」

と、優しく笑つてくれた。

・・・ドキッ。

私は朝から先輩の笑顔にときめいていた。

大学の頃からずっと変わらない優しい笑顔。

あの頃はこの笑顔が見られる距離にいるだけで幸せだった。

今は・・・もつと近く・・・

隣にいるけれど・・・。

「じゃ、行つてくる。」

先輩は玄関まで見送りに出た私に軽くキスをした。

「いってらっしゃい。」

私は笑顔で送り出した・・・だけど・・・

本当はちょっと寂しかつたりなんかする。

先輩と3日は確実に会えない・・・。

先輩の部屋に居候し始めてから、ずっと先輩と一緒にだった。

毎日、先輩を送り出して掃除して洗濯して、ご飯を作つて。

それが当たり前になつてきた。

でも、そろそろアパートに帰らなきや・・・と、思つていたら

先輩の口から予想外の言葉が出てきた。

“ずっと一緒にいたい・・・。”

その言葉がすぐ嬉しかった。

今私はただの居候でしかないけれど・・・

それでも先輩が一緒にいたって言つてくれた事がすぐ嬉しかった。

だから、余計に3日間も先輩と会えないと思つと寂しいんだよねー。

先輩を送り出してから私はお昼から派遣会社の登録会を行つた。

会社をクビになつて2週間・・・

ずっと就職活動をしているけれど、いまいち結果がふるわなかつた。

途中採用で、しかも25歳といつぱりローン年齢・・・。

面接で聞かることはだいたい同じも同じ。

“今、恋人はいますか？”

“いる”と答えれば、年齢的にもすぐに結婚してもおかしくないと思われ、

“いない”と答えてもそれはそれで腰掛け就職だと思われる。

そんなワケで未だに新しい仕事先は見つかっていなかつた。

それで一応、“派遣”というのも視野に入れた。

登録会は思つていたより時間がかかつた。

派遣会社の登録データ用の履歴書や職務経歴書を書いたり、

スキルチェックをしたり・・・

それが終わつた後は派遣会社の担当者の人との面談。

どんな職種がいいか、勤務地はどの辺りがいいかとか。

制服は有つた方がいいか、残業はどの程度までなりやれるのかなん
ていう

結構細かいことまで質問された。

「では、千秋さんにお願いできやうなお仕事があつましたら、
すぐここに連絡いたします。」

「はい、よろしくお願ひします。」

派遣会社を後にし、ため息をつきながら窓を閉じると

薄つすらと雲が赤くなつていた。

もうこんな時間・・・。

今日は先輩もいないし、夕飯は冷蔵庫にある余り物で済ませりゃ お
うかなあ・・・。

・・・と、その前に、夜はあつと暇だからロボロでも借りて帰れつ
かな。

そんな事を考えながら駅に向かつて歩いていると、

「・・・千秋さん。」

と、不意に後ろから呼び止められた。

若い女性の声がした方を振り返ると

今井先生のお嬢さん・・・澄子さんだった。

「・・・あ・・・」んこちは。」

何か私に用なのかな?

不思議に思いながらも私はとりあえず笑みを返した。

「・・・あの・・・ちょっとお話が・・・」

「はい、なんでしょう？」

私に話があると言った澄子さんの顔はあまり余裕が感じられず、愛想笑いすらしていない。

何か余程深刻な話なんだろうか……？

私と澄子さんは近くの静かな喫茶店に入った。

向かい合ひの形で座った澄子さんはしづらへ経つてもなかなか話を切り出そつとしなかった。

まるで、何か言い難い事があるみたいに……。

少し緊張した空気が私と澄子さんの間に流れる中、

オーダーしたコーヒーをウエイトレスが持ってきた。

力チャン……と少しだけ音を立てて、

コーヒー カップがテーブルに置かれた。

しかし、それすらも澄子さんの田には映っていないみたいだ。

そして、ウェイトレスが離れて行つた後、

「あの・・・」

・・・と、ようやく口を開いた。

小さな声だけ意を決したようなその声に、私は少しひクリとした。

「広瀬さんと別れてください。」

・・・え？

彼女の口から出た言葉に私は耳を疑つた。

「・・・。」

無言で瞠目している私に彼女はさりに続けた。

「広瀬さんを解放してあげて欲しいんです。」

解放・・・？

「それって・・・どうこいつ・・・。」

「父は広瀬さんをとても気に入っています。

行く行くは今井建築事務所を任せたいとも言つていました。」

確かに・・・今井先生は先輩の事をとても信頼しているみたいだし、かわいがつてもいるようだけど・・・。

「私も将来、父の跡を継ぐつもりです。

・・・広瀬さんと一緒に。」

それは・・・つまり・・・。

「・・・父は私と広瀬さんが結婚する事を望んでいます。」

「・・・。」

「でも、あなたが広瀬さんから離れない限り、無理なんですね。」

「……………に私が…………邪魔つて事？」

私が…………先輩の足枷になつていい…………？

「…………これは、広瀬さんの為に言つてる事なんです。」

「先輩の…………？」

「はい。」

先輩の為…………。

「千秋さんはこの先、広瀬さんを支えていける自信あるんですか？」

「それは……」

私はそんな事は考えたことなんてなかつた。

ただ、一緒に居られるだけでいい……そう思つていた。

「私は支えていける自信があります。

私なら将来、妻としてだけでなく建築士として同じ立場に立てますし。

それに……私には“建築士・今井龍哉”という後ろ盾もあります。

私の目を真っ直ぐに見つめ、彼女はハッキリと言い放った。

「……。

・・・私には・・・何もない・・・。

何も・・・。

何もないどころか今なんて失業中だし、

先輩の部屋に居候しているだけ。

むしろ私が先輩に支えてもらっている。

「私と千秋さん……どちらが広瀬さんと結婚したほうがいいか……

わかりますよね……？」

「私に……身を引け……と？」

「はい……広瀬さんの事、本当に愛しているなら……

わかつてくれますよね？」

先輩を愛しているなら……。

「・・・。」

「広瀬さんの・・・為なんです・・・。」

追い討ちをかけるよつた言葉に私は何も言い返せなかつた。

先輩の為・・・。

私には先輩を支えられる程の力も後ろ盾もない・・・。

先輩が澄子さんと結婚すれば・・・

すべてうまくいく・・・。

・・・私が傍にいるより・・・せつと・・・。

「・・・わかりました。」

私は先輩が大阪から帰つて来る前に部屋から出て行く事、

先輩の前から姿を消すことを彼女と約束をした。

これでいい・・・。

だって・・・私がこのまま先輩のそばにいても

多分、いつか先輩は・・・

先輩の部屋に戻り、私はすぐに寝室の隅に置いていたバッグを持って自分のアパートへ戻つた。

元々、今日先輩の部屋を出るつもりで昨日、荷物をまとめて置いたバッグ。

その後、先輩にずっと居て欲しいと言わされて元に戻そうとしていた。だけど、朝からバタバタしていた所為ですっかり忘れてそのままになっていた。

まさか、それをそのまま持つて帰る事になるなんて・・・。

私は自分の部屋に戻つてからもしばらく動けないでいた。

夜11時前。

シン・・・としている部屋の中、バッグに入れたままの携帯から

先輩専用の着メロが鳴り響き、私は少しじブンクンとした。

先輩の声が聞きたい・・・。

でも、澄子さんと約束をしたから携帯に出るわけにいかない。

しばらく鳴つて切れた後、バッグから携帯を出し、

先輩からの着信を拒否にした。

先輩と別れる・・・。

先輩の為に・・・。

その方がきっと先輩にとって一番いいから・・・。

私は自分に必死にそう言い聞かせた。

あー・・・疲れた・・・。

ホテルの部屋に戻った俺はすぐさまベッドに倒れこんだ。

今朝早くにいきなりトラブルが起きて大阪に来て

それからずっとひぐくにメシも食わずに仕事をしていた。

本当なら死ぬほど腹が減っているところだけど

脳みそまで疲れきっている所為か空腹なんてまったく感じていなかつた。

油断したらなんかこのまま寝てしまいそうだけど、

その前にナルに電話、電話・・・。

ナルの声が聞きたい。

俺は携帯を手探しで出し、ナルの携帯へかけた。

数回コール音が聞こえ、なかなか出ないな・・・と思いつつ、

腕時計で時間を確認した。

11時前か・・・。

寝るにしては早いし、風呂にでも入っているのかもしれない。

まあ、後で折り返し掛けてくるだらう。

俺は携帯を閉じてナルからの電話を待つことにした。

1時間後。

もつ一度ナルに電話をしてみたけれど、やつぱり出ない。

どこかに携帯放置してるのかな？

おやすみメールだけ送つておくか・・・。

俺は睡魔と闘いつつ、なんとか1時間粘つて起きていたけれど

もう限界だった・・・。

重い瞼をこすりながらメールを打つてすぐに目を閉じた。

翌日、朝。

ホテルのモーニングコールに起こされ、目が覚めた俺は

そういうえば大阪にいるんだった・・・と思い出し、

朝から気が沈んだ。

最近はずっとナルの声に起しあれていたから余計だ・・・。

ナルからメール来てるかな?

ナルのモーニングメールが聞けないならせめてモーニングメール・

と、思った俺は携帯を開いてまたがつかりした。

ナルからはメールも着信もなかつたからだ。

おかしいな・・・。

いつもなら返してくれるのに。

忘れてるのか、それともまだ寝てるのかもな・・・?

だつてまだ7時30分だし。

しかし、それからずっとナルが電話に出る事はなかった。

折り返し掛け直してくる事もなかつた。

メールもまったく返つて来ない。

おかしい・・・。

最初はただタイミングが悪いだけだと思つていた。

けど、いくらなんでも電話はともかくメールくらい普通返すだろ？

だって、俺はナルの彼氏なんだし・・・。

・・・まあ、明日帰れることになつたからいいけど。

トラブルはなんとか無事に4日で解決し、明日の朝東京に帰れることになつた。

帰つた後はそのままマンションに戻りたことひだりだけ

事務所に顔を出しても先生に報告しなければならない。

あ～あ、・・・早くナルに会いたいな・・・。

たつた3・4日離れているだけなのに俺はもう禁断症状が出そうだった。

大阪に来てからずっとナルの声も聞けてないから・・・といったものもある。

そしてやっとこの事でようやく仕事を片付け、東京に戻った俺は事務所に顔を出した。

先生との話を終え、マンションに帰らつと席を立つと

澄子ちゃんが話しかけてきた。

「広瀬さん、一緒にランチ行きませんか？」

時計を見ると12時を少し過ぎたところだった。

ランチに行くにはちょうどいい時間だけれど、

俺は少しでも早くナルに会いたかった。

「あー、じめん。今日はもう帰るから。」

「えー、じゃー、ランチ食べて帰るつづりのせどりですか?」

「いや・・・早く帰りたいし・・・」

「私、広瀬さんがパパと話しあるの待つてたんですよー?」

澄子ちゃん、言に出すところからなあ・・・。

「いいや、澄子。」

びびしたものかと考えていると、今井先生が助けてくれた。

「広瀬は大阪から帰つたばかりで疲れてるんだぞ?」

「わかつてゐるけどー・・・。」

「だったら、今日のところは勘弁してやれよ。

それに広瀬だって早く帰つて彼女の顔が見たいだろ? な?」

先生は俺の顔をちらりと見た。

「・・・。」

ハイ、まったくもつてその通り。

「・・・わかつた。」

澄子ちやんは先生に諭され、ムッとした表情で踵を返した。

それを見た先生は深いため息をついた。

「じゃ、広瀬。氣をつけて帰れよ。」

と、言った。

先生・・・ありがとう。

先生のおかげで澄子ちゃんから解放された俺は
ようやくマンションに戻った。

「ただいま・・・。」

シーン・・・。

あれ・・・？

ナル、いない？

「ナルー？」

リビングにもいない。

「ナル？」

寝室にもいない。

「ナルちゃん？」

風呂でもない・・・。

あとほ・・・どこだ？

俺の書斎かな？

「ナルさん？」

あれ・・・いない。

じゃあ・・・後はもう一つの部屋？

てか、これだけ呼んでるのに出てこないって事は
やつぱいないのか。

買い物にでも行ってるのか、また面接にでも行っているのかもしれ
ない。

・・・だけど、俺はなんだかものすごく嫌な予感がした。

数日前からずっと繋がらないままのナルの携帯。

いつもなら折り返し掛けてくるはずなのに

まったく掛かって来ない事やメールすらない事・・・。

それに・・・部屋の中をよく見ると

ナルが使っていた物が全てなくなっている。

俺は急いでナルのアパートに向かった。

「・・・そんな・・・どうして・・・。」

俺は愕然とした・・・。

ナルのアパートへ着いて合鍵でドアを開けてみると、

部屋はすでに蛻の殻だった・・・。

ガラン・・・とした部屋・・・。

この部屋だけまるで時間が止まつたみたいに

静まり返っていた・・・。

そして自分の部屋に戻った俺は、会社から帰った時に
ポストから取り出した郵便物の束の中に、

他とは違う手紙があるのに気がついた。

“ 広瀬優一様 ” と書かれた封筒の文字は間違いなくナルの字だ。

消印は、俺が大阪に行つた翌日の日付・・・。

俺は恐る恐る封筒を開けた。

その中には俺の部屋の鍵とたつた一行だけの手紙。

“ 私の事は忘れてください。『ごめんなさい。』

その言葉が何を意味するのか・・・

理解するにはそう時間はかからなかつた。

ナルは俺の事が嫌いになつたんだろうか・・・?

だから、俺が出張に行つてゐる間に黙つていなくなつたのか・・・?

・・・いや・・・違う・・・。

ナルはそんな事が平氣でできるような子じゃない。

だけど・・・じゃあ、なぜ・・・?

何か原因があるにしてもさっぱりわからない・・・。

俺が大阪にいる間・・・何があつたんだ・・・?

それから数日経つてもナルの消息はまったく掴めなかつた。

矢野にはもちろんの事、ナルの実家にも電話をしてみた。

だけど、ナルは実家にすら帰つていないし、連絡さえしていなかつた。

実家に帰つていないとすれば・・・一体、どこに行つたんだ？

友達のところにでも行つているんだろうつか？

それとも・・・

まさか・・・

田高のところ・・・？

もし・・・田高のところなら・・・

やつぱりナルはアイシの事をまだ忘れていたって事なのか・・・？

もやもやした気持ちのままナルの事を考えながら仕事をしている所
為か、

ちつとも仕事が持つていない。

それで二二二数日はずっと残業をしている。

・・・ R R R R R 、 R R R R R ・・・

そして今日も定時をかなり過ぎるまで残業していると

矢野から携帯に電話がかかってきた。

会社にかけて来ていないという事は、

仕事の話じゃなく、プライベートな話・・・

・・・ナルの事かっ！？

「もしもし。」

『もしもし、矢野だけど。今いいか？』

「ああ。」

『愛美ちゃんの事なんだだけ』・・・・。

「何かわかったのか？」

『昨日、北海道支店に用があつて電話した時にあいつが出て、

ちよつと話したんだ。

・・・で、俺ももしかしてと想つて愛美ちゃんの事

聞いてみたんだけど・・・。』

「・・・。」

俺はまじめつと息を呑んだ。

『・・・結論からいひつと口調のとくはなは行つてなかつた。』

「 わーか・・・。」

全身の力が一気に抜けていくのがわかった。

『 実は田高も愛美ちゃんにずっと謝りたくて電話してたらしんだけ
どな。』

けど、まつたく電話にも出ないし、メールも返って来ないから
どうしたもんかと考えてたらし。』

「 謝りたかったって・・・?」

『 まあ、あいつとしては自分の所為でクビになつたようなもんだし、
责任感じてるんだる。』

それから、田高にも愛美ちゃんが行きそつとなつたの聞いてみた
んだけど、

『 わざわざからんらし。』

「やつか・・・。」

『そんなワケだから、愛美ちゃんが田高のところへ行つてなにつて事だけ

お前に云えておけりと想つてな。

・・・また、何かわかつたら連絡するから。』

「・・・ああ、・・・サンキュー。」

矢野との電話を終えた後、俺はため息をついた。

ナルが今さらアイツのところに戻るはずがないと思ひながら、一瞬でも疑つた自分に腹が立つた。

そして、田高のところへは行つていないとわかつた時、

ホツとしたと同時にまたナルの消息がさっぱり見当がつかなくなつた。

それから一ヶ月。

俺はずつとナルを探し続けた。

大学時代のナルの友達や後輩、先輩・・・

ナルが行きそうな場所も思い当たる場所すべて・・・。

だけど・・・

ナルはどこにもいなかつた。

ナル・・・

どこへ行つたんだ・・・？

どこへ・・・

デスクの上で両肘をせき、指を組んだ上に額を乗せて皿を喰いついていた

後ろから澄子ちゃんの声がした。

「広瀬さん。」

俺は態と返事をしなかった。

今は誰かと会話する気になれなかつたからだ。

だけど澄子ちゃんは俺が“話しかけるなオーラ”を出してこるので

「広瀬さん?」と俺の顔を覗き込んできた。

「・・・何?」

ため息をつきながら、少し不機嫌そうに返事をした俺

澄子ちゃんは一瞬、眉間に皺を寄せた。

「あの・・・明日、ハウスメーカーの展示場が新しくオープンするらしいんですけど、

一緒に見に行きませんか？」

澄子ちゃんは“強制デート”的件があつてしまへば先生の手前、おとなしくしていたけど、ここ最近また俺をあれやこれやと休みの前の日になるとこりこり誘つてきていた。

だけど、俺はその度に断つていた。

ただでさえ、澄子ちゃんとあまり接触を持たないといつてこいた。

それに、今はそれどころじゃない・・・。

澄子ちゃんに構っている暇があるならナルを捜したい・・・。

「『めん・・・用事があるんだ。』

「……土曜日も日曜日もですか？」

“用事がある。”……やつは、だいたい「やつですか。」と言つて、

諦めていた澄子ちゃんだけ、今日なぜか食に下がつてきた。

「うさん……土曜日も日曜日も。」

「……彼女……ですか？」

「あ……。」

多分、澄子ちゃんは“彼女”と“彼女”の意味で聞いてきたんだと思つ。

それは違つけれど“彼女”の事には違いない。

だから、俺は敢えて“そつだ。”と答えた。

だけど、そんな俺に澄子ちゃんは意外な言葉を口した。

「千秋さん・・・まだ広瀬さんと付き合つてゐるんですか・・・？」

その言葉の意味がまったくわからなかつた。

「千秋さん・・・もういなーんですよね・・・？」

え・・・？

「・・・？」

“もういない”・・・澄子ちゃんはナルがいなくなつた事を知つて
るのか？

「・・・。」

黙り込んだ澄子ちゃんは俺から少し視線を外し、俯いた。

「ナルがいなくなつたの・・・どうして知つてゐるの?」

「・・・パパがそう言つてたから。」

俯いたまま澄子ちゃんは小さな声で答えた。

嘘だ・・・。

ナルがいなくなつた事を知つてゐるのは・・・

矢野と智子ちゃん・・・そして・・・日高・・・。

後はナルの家族だけ・・・。

俺は社内の誰にもナルがいなくなつた事を話していなかつた。

「最近、元気ないね。どうしたの?」と聞かれても

誰にも話していない・・・。

澄子ちゃんにも・・・先生にも・・・。

「俺・・・先生にその事話してないけど・・・？」

「え・・・？」

澄子ちゃんはハッと顔を上げた。

「澄子ちゃん・・・なんで知ってるの？」

俺は澄子ちゃんは顔を真っ直ぐに見つめた。

「・・・。」

澄子ちゃんは俺と田が会つと咄嗟に視線を外し、

また黙り込んだ。

「・・・何か・・・知ってるの・・・？」

澄子ちゃんが知らないはずの事を知っている。・・・。

だとしたら・・・俺が知らない“何か”を澄子ちゃんは知っている。・・?

「・・・。

相変わらず黙つたままの澄子ちゃんはキュッと唇を噛んだ。

そして、居た堪れなくなった彼女は踵を返し、事務所を出て行こうとした。

だけど・・・そうはさせない・・・つー

俺は立ち上がり、澄子ちゃんの手首を掴んだ。

「つー?」

驚いた顔で振り向いた澄子ちゃんの目には涙が滲んでいた。

「「めんなさい・・・。」

しばらくの沈黙の後、澄子ちゃんはその言葉の後に
俺が大阪に行っている間にナルに会つたこと、

ナルに俺と別れるよつに言つた事、

ナルに何を言つたのかをすべて話した。

そして、俺がナルから離れるのを待つていた事。

だから、わざわざ俺が出張に行っている日にナルに近づいた事。

・・・なんてことだ・・・。

「なんで・・・そんな事・・・。」

俺は手で顔を覆いながら頃垂れた。

「・・・好きなんです・・・」

「・・・」

澄子ちゃんの口から出た言葉の意味はなんとなくわかつていた。

「私・・・広瀬さんの事が好きです。」

澄子ちゃんは俺の顔を真っ直ぐに見つめ、ハッキリと呟いた。

だからって・・・

俺は田舎者ないでいた。

「千秋さんなんかに広瀬さんを取られたくないなかつた・・・。」

“なんかに”・・・って・・・

「千秋さんと再会するまでは、広瀬さん私のお願いも全部なんでも聞いてくれたのに・・・

でも、千秋さんが広瀬さんの前に現れてから急に・・・

広瀬さん、私に冷たくなった・・・。」「

それは・・・違う・・・。

「千秋さんがいなくなれば・・・」

「それは違うよー」

俺の少し大きな声に澄子ちゃんはビクッとした。

「それは違うよ・・・俺は・・・ずっとナルの事忘れていなかつた。」

大学の頃からずっとナルが好きだつた・・・。」

「・・・。」

・・・ R R R R R R 、 R R R R R R ・・・

重苦しい沈黙の中、俺の携帯の着信音が鳴り響いた。

着信表示を見ると矢野からだった。

もしかしたら・・・ナルの事かもしれない・・・。

「出ないで・・・。」

着信音にかき消されそうなほど小さな声で澄子ひやんが言った。

だけど・・・

もし、ナルの事だつたら一刻でも早く知りたい……。

「もしもし・・・。」

携帯に出た俺の顔を澄子ちゃんは悲しそうな顔で見つめていた。

『もしもし、俺だ。』

矢野は少し急いでいる様子の声で話し始めた。

『愛美ちゃんの居場所がわかつたぞ。』

「つー・・・ホントか?」

『ああ・・・わざわざ日高から電話があった。』

「日高から・・・?」

その言葉に俺は思わず息を呑んだ。

「日高が・・・なぜ・・・?」

『今日の昼間に田高が出張先で見かけたらし!。』

「……どこなんだ?」

『沖縄だ。』

「沖縄?」

『ああ、少し遠田からだつたけどおそらくまちがいないだろ?って
言つてた。』

田高も声を掛けようとしたみたいなんだが、仕事中で無理だった
らしい。

どの辺りで見かけたか詳しい事聞いたから……書くものあるか

?』

「あ、ああ……。」

俺はデスクのメモ用紙に矢野から聞いた情報を書き写した。

電話を切つた後、俺は俯いたままの澄子ちゃんに言つた。

「澄子ちゃんの頼みを聞いてたのは先生に言われてたからだよ。」

「パパが・・・？」

「うん・・・だから、例えナルと再会していなくとも・・・

俺は澄子ちゃんの気持ちに応える事は出来なかつた。」「

「・・・。」

「いめん・・・。」

澄子ちゃんの気持ちは前々から気付いていた。

あれだけ積極的にアプローチされればいくら鈍感な俺だってわかる。

「俺・・・ナルじゃないと駄目なんだ。」

それだけ言って、澄子ちゃんの横を通り過ぎ、

俺は事務所を後にした。

翼口。

俺は朝一で沖縄行きの飛行機に乗った。

2時間半の道のりがやけに長く感じる。

那覇空港に着き、昨日、田畠がナルを見かけたといつ

場所までタクシーで向かった。

・・・ナル・・・

・・・どうか・・・間違いじゃありませんよ!・・・!

俺は祈るような思いでいっぱいだった。

田高がナルを見かけたという場所は那覇空港からは

距離的にそう遠くはない場所だった。

だけど・・・俺はその場所に降り立った瞬間、

絶対にナルがいると確信した。

なぜなり・・・

・・・そこは大学時代、野球部の合宿で訪れた場所・・・

そして・・・

俺にとって忘れられないナルとの思い出の場所だった・・・。

ナルがもし本当にここにいるならどこか近くに泊まっているはずだ。

まずは風漬しに当たつて行くか。

いや・・・それよりも・・・

ナルも大学時代の事を思い出してここに来ていらるなら・・・

多分、あの合宿の時と同じ所に泊まつてゐるはずだ。

だとしたら・・・

あそこか・・・つ！

俺は合宿の時と同じ旅館を探した。

名前までは憶えていなかつたけれど、

外觀と當時の記憶を辿つていけば

そつ難しいことではなかつた。

田の前に広がる碧い海は4年前のあの時と変わっていなかつた。

旅館の近くには海があつて潮の香りがしていた。

ナルはここに泊まつていて、いつも海を見に出かけてくるらしく。

やつぱり・・・ここだつたか。

そしてその旅館はすぐに見つかった。

旅館のフロントでナルの事を聞くと

まさしく泊まつているという予想通りの答えが返つてきた。

そういえば・・・4年前、初めてここに来たときもナルは
綺麗な碧い海に感動して大はしゃぎしてたつけ・・・。

ナル・・・いるかな・・・?

どこまでも続いていそうな白い砂浜には休日だからか

カップルや家族連れが何組かいた。

その中をナルを探しながら歩いていると、

少し遠くの方に一人で座つて海を眺めている女性の姿が目に入った。

ナル・・・?

一步一歩近づくにつれ、段々顔がはつきり見えてきた。

いた・・・。

やつぱり、ナルだ・・・。

「・・・ナルツ！」

まだ少しはなれた距離にいるナルに思わず声をかけた。

よく考えれば、そんな事をすればナルが逃げ出すのはわかりきつていふ事で。

案の定、ナルは驚いた顔で俺の姿を認めるとすぐに立ち上がりて走り出してしまった。

「ナルツ！」

俺はすぐにナルを追いかけた。

ナルは結構、足が速い。

それは大学の頃からわかつっていたことだけど

この間の澄子ちゃんとの“強制デート事件”の時に

俺のマンションから走り去るナルの逃げ足の速さに

再認識した。

だけど、ijiには砂浜。

ナルはあまりスピードが出ていない。

そして段々と縮まるナルとの距離。

あと少し・・・

あともう少しでナルに手が届く・・・っ！

「あ・・・っ！？」

俺が手を伸ばした瞬間、ナルは砂浜に足を獲られた。

「ナルッ！大丈夫かっ！？」

座り込んでしまったナルの前に廻り込むと

肩で息をしながら俺とは田を合わさないようにナルは俯いた。

「ナル・・・・。

「・・・先輩・・・ビラシ・・・」元氣のんですか・・・?」

「どうしてって・・・そんなの決まってるだろ?ナルを迎えて来た。

「

「・・・え・・・?」

ナルは少し驚いた表情でゆっくりと顔をあげた。

俺が迎えて来たのがそんなに意外か・・・?

「ナル・・・ビラシして黙つていなくなつたんだよ・・・?」

澄子ちゃんに俺と別れてくれと言わたのが原因なのはわかっていた・・・。

だけど・・・“どうして?”と聞いたのはナルの口から

はつせりと聞きたかつたから。

“俺を嫌いになつたワケじやない”と重ね葉が・・・。

「・・・。」

ナルは澄子ちゃんとの一件を俺が知らないと思つてゐるのか
黙り込んでしまつた。

「澄子ちゃんに“俺と別れてくれ”って言われたから?」

「つー?」

「昨日・・・澄子ちゃんから全部聞いたよ。」

「・・・。」

「ちよつとした会話をしてて、澄子ちゃんがボロを出して・・・

それで問い合わせたら全部、白状したよ。」

「・・・。」

それでもまだ黙つたままのナル・・・。

「・・・それとも・・・ナルは俺の事が嫌いになつた・・・？」

“違つ”と、言つのはわかっている・・・でも・・・

「・・・。」

ナルは無言で首を横に振つた後・・・静かに涙を流し始めた・・・。

俺はナルが“違つ”と首を振つたことにホッとして、肩を抱き寄せた。

「俺はアイツとは違つよ・・・。」

先輩はそつと私の抱きしめた腕の力を強くした・・・。

“俺はアイツとは違つよ・・・。 ”

先輩はわかつてくれていたの・・・?

澄子さんから先輩と別れてと言われた時・・・

もしも・・・このまま私と先輩が付き合つていたとしても

康成さんが佐伯さんを選んだように仕事の為に私を捨てて、
澄子さんを選ぶんじゃないかって思つた・・・。

だから・・・私は・・・。

何れ先輩が私から離れていくような気がして怖かった・・・。

それから先輩は私が泣き止むまで

ずっと抱きしめてしてくれた。

もう、先輩とは会えない・・・。

そう思っていた・・・。

それが今、じうじてわざわざ私を迎えてくれた・・・。

そして、先輩は私の気持ちをわかつてくれていた・・・。

それなのに・・・私は・・・。

「・・・先輩・・・」めんなさい・・・。」

ようやく涙が止まつた私がそう言いつと

「もひ・・・バカだな・・・。」

と、先輩は私の頭を優しく撫でながら微笑んだ。

「・・・じめんなさい・・・。」

「ホントに・・・バカだな・・・。」

「じめんなさい・・・。」

「ホントにバカだよ・・・こんなにナルの事、

不安にさせてたなんて・・・。」

「え・・・?」

「こんな事になるなら……もうと早く

結婚したいって言えよかつた……。」

・・・先輩・・・?

「同棲するのも……もづくと前から考えてた……。

ナルと結婚もしたいって……ずっと思つてた……。」

「・・・つー

「……けど、突然ナルがクビになつて……そんな時に言つたら、

なんかついでみたいな感じでナルが嫌がるかな……と思つて

言わなかつたんだ……。」

・・・先輩・・・そこまで考えててくれたの・・・?

「ナル・・・俺と結婚してほしい。」

「・・・先輩・・・。」

息が止まりそうだった・・・。

ずっと・・・ずっと・・・一緒にいたいと思っていた人からの

思いも寄らなかつた言葉・・・。

・・・でも・・・

「・・・でも、先輩・・・澄子さんは・・・?」

「そんなの気にする必要はないよ。」

先輩は私の不安を一蹴するよつにキッパリと言つた。

「そもそも俺は、行く行くは独立するつもりだし、

『今井建築事務所』を継ぐつもりなんてない。

それに今井先生は本来、公私混同するような人じゃない。

だから、俺が誰と付き合おうが結婚しようが

それに対しても何か言つて来る事なんて有り得ないよ。」

「そ、そつなんですか・・・？」

「ああ・・・むしろ今井先生は俺に早くナルと結婚しろって

言つてゐるぐらいなんだから・・・。」

先輩はそう言つと少し顔を赤くした。

「・・・だから、先生が俺と澄子ちゃんを結婚させたがつてゐるなんて

嘘だよ。……澄子ちゃんのでまかせ。」

でまかせ……。

私、まんまとそれに騙されたのー？

「……で……、返事は……？」

「……へ？」

「こや……ひとつもの……

「あ……。」

“ ひとつもの……って、プロポーズの返事って事だよね……？

「あ、あの・・・ホントに私でいいんですか・・・？」

「俺的には“ナルでいい”じゃなくて・・・“ナルじゃなきゃダメなんだ。」

ストレートなその言葉に胸がキュン・・・となつた。

「・・・よ、よろしくお願ひします・・・。」

抱きしめられたまま心臓がバクバクいつてゐるのを

なんとか悟られないよつこしながら言った。

「・・・よかつた・・・断られたらどうしようかと思つた・・・。」

先輩はハーツと息を吐き出しながら私の肩に顔を埋めた。

断る訳・・・ないのに・・・。

「ナル・・・帰ろ。」

「はい。」

柔らかい笑みで私を見つめて言った先輩に私も笑って答えた。

だけど、先輩と一緒に立ち上がろうとした瞬間、

右足首に激痛が走った。

「痛っ！」

「ナルッ？」

再び、砂浜に座り込みそうになつた私の体を先輩が支えてくれた。

「足・・・捻つた？」

「 もう……みたいですね。」

砂に足を捕られた時に捻つたみたいだ。

「 もうじやあ、ちょっと歩くのは無理だな。」

先輩は砂と私に背中を向けてしゃがんだ。

「 ナル、 おんぶ。」

「 えつー……で、 でも……。」

「 その足じや歩けないだろ? 、 早く。」

私は仕方なく、先輩の首に腕を回し、

背中に寄りかかった。

「 あ……は、 はい……。」

仕方なく・・・とは言つもの、実はものすゞく嬉しかつた・・・。

「なあ、ナル・・・憶えてる・・・？」

4年前、ここに宿した時も俺がナルをおびつて

旅館まで帰った時の事。」

「はい、憶えますよ。」

「あの時もナル、砂浜で転んで足を挫いたんだったよな？」

「あはは、そうでしたね。」

「あの時・・・実は俺、ものすごいヘキヘキしてたんだぞ。」

「どうしてですかー？」

「そりゃ、好きな女の子をねぶつらひるがせめたかったけど、

……もう一つ……別の理由で。」

「なんですか？」

「ナルの胸が俺の背中に当たつたから。」

俺が笑いながらいつの間にかナルは急に暴れだした。

「えつ！？・・・や、やだつ！？先輩つ。

お、降ります！降ります！降ろしてくださいつ！

俺がナルの方に振り向くと顔を真っ赤にして

ポカポカと俺の背中を叩いた。

「ひつ、ナル、そんなに暴れると落つっちゃうぞ？」

「だ、だつて・・・先輩が変な事言つから・・・」

「変な事つて・・・」

「・・・。」

ナルは真っ赤な顔をしたまま黙り込んだ。

「あの頃ならともかく・・・今は身も心も俺のモンなんだから、

そんなに恥ずかしがることないだろー?」

俺は態と軽い口調で笑いながら言つてみた。

すると、ナルは「そ、そうですけどー・・・。」と言ひながら

俺の背中に顔を埋めた。

それから、俺とナルは旅館まで無言で帰つた。

一言も会話はなかつたけど、それは決して『氣まずい雰囲氣』じゃなく、

ただ・・・

言葉なんていらない・・・

そつ思つた・・・。

翌日。

約一ヶ月ぶりに東京へと戻つてきたナルを待つていたのは

智子ちゃんの説教だつた。

約小一時間、懇々と説教する智子ちゃんに俺と矢野で

「まあまあ、そろそろそのへりこで・・・」と

やつとのことで宥めつかせ、久しぶりに4人で食事をする事になつ

た。

「あー、そうだ、愛美ちゃん。一ついい知らせがあるんだ。」

智子ちゃんの説教がよみがへり、落ち着くのを待っていたかのように

矢野が口を開いた。

「・・・?、なんですか?」

「愛美ちゃんの“クビ”が取り消しになつたんだ。」

「「えつー?」」

矢野の口から出た“いい知らせ”は思つてみなかつた事だった。

俺とナルは同時に声をあげ、顔を見合せた。

「それって……ホントなんですか？」

「ああ、そのかわり社長が解任になつて、佐伯さんも辞めたよ。」

「え……ど、どうしてですか……？」

「これはまた……どえらい展開だ……。」

「先週の金曜日に社長の使い込みが発覚して役員会が開かれたんだ。」

「その時に社長の解任が決まって……で、佐伯さんも

社長の口ネで入つたつてのもあつたし、居辛くなるつて

予想できたのか、その日のうちに辞めたよ。」

「……そうですか……それにしても使い込みつて……。」

「経理の奴らは前々からおかしいって思つてたらしくて

密かに上層部と一緒に探つてたらしくんだ。

それに加えて今回の愛美けやんの不当解雇と口高の

突然の人事異動・・・だろ?」

「よいよ人事部も動き始めて徹底調査になつたってワケ。」

「う、ドラマみたいですね・・・。」

確かにドラマのような展開・・・だな。

「ははは、ホント、まさか自分の会社でこんな絵に

描いた様な事が起るとは思つても見なかつたけどな。」

矢野はゲラゲラと笑い飛ばした。

・・・ん?

ところの事は・・・

「・・・それじゃあ、田高も戻つてくるのか?」

ナルのクビが取り消しになつたなら当然、田高の異動もなくなるだ
るつ。

「あー、その事なんだけど・・・確かに田高の異動も

不當なものだつて事になつてアソシモーいちに戻る予定だつたん
だけど

「北海道に残るつて言い出したんだ。」

「なんでまた?」

「北海道支店てさ、他の支店よりも経理システムとか伝票処理だと

かが

ものす"じく遅れてるんだよ。

んで、田高が北海道支店のシステムをまともなものにして、
それから改めて辞令が出たら戻るつて言ひてや。」

「ふーん……。」

「……康成さんらしいですね。」

ナルがクスリと笑いながら言つた。

“康成さんらしい。”

その言葉は田高の事をよく知つていないと出ない言葉だ。

そういうのを聞くとなんとなく“田高の元カノ”部分が垣間見えた。

半年後。

俺とナルは今、離れて暮らしている。

・・・といつと、「別れたのかよつ！？」と思われそうだが、

実は結婚が決まって“千秋愛美”から“広瀬愛美”に変わる前に家族で過ごす為に結婚式の一週間前からナルは実家に戻っていた。

そして一週間後の今日。

俺は結婚式場の新郎控え室で式が始まるのを待っていた。

・・・コンコン。

ドアをノックする音がして「はい。」と返事をしながらもしかしてナルかな？なんて思つていると、

ドアを開けて入ってきたのは俺達の結婚式を

取り仕切る式場の男性だった。

「そりそろお時間となりましたので、こちらの方へどうぞ。」

「はい。」

もつすぐ・・・

もつすぐ、ナルに会える。

ナルが実家に戻っていた一週間、俺は新婚旅行に行くためになるべく仕事を片付けていくと連日遅くまで残業をしていた。だからナルとは会えなかつたし、電話もほとんどできなかつた。

一週間ぶりの再会だ。

世話係の男性に案内されてチャペルに入ると

俺の親族とナルの親族、それにたくさんの列席者がすでに顔を揃えていた。

その中には矢野と智子ちゃんのカップル、今井先生もいる。

澄子ちゃんは・・・

さすがに呼ぶ気にはなれなかつた。

ちなみに澄子ちゃんはあの後、今井建築事務所を辞めた。

・・・いや、“辞めさせられた”と言つたほうが正しいだろう。

といつのは、あの一件が今井先生の耳に入り、

怒り狂つた先生が事務所を辞めさせたのだ。

元々、先生は自分の事務所に入る事に反対していた。

身内だといつ事で甘えが出てしまつから。

だけど澄子ちゃんがビービーしてもといつので仕方なく

公私混同をする事のない先生だけど、

渋々、事務所に入れたらしい。

そんな訳で澄子ちゃんは今、別の建築事務所に預けられている。

チャペルの中がシン・・・と静まり返り、

聖歌隊が歌い始めると同時に入口の大きな扉が開けられ、

二人のシルエットが映し出された。

そのシルエットは静かにゆっくりとバージンロードの上を歩いて

俺の方へと近づいてきた。

段々と・・・

少しずつ、シルエットからはっきりとした姿に変わる。

お義父さんにエスコートされて近づいてくるナル・・・。

純白のウエディングドレスに身を包んで少し俯いている。

あまりに綺麗なナルのドレス姿に俺は思わず息が止まつそうになつた。

ウエディングドレスはナルと智子ちゃんの一人で選んだ。

俺も一緒に選びに行くと、『「当日の楽しみが減るからダメです。』

と、ナルと智子ちゃんに言われ、矢野にも

「たまには男同士でデートしようぜ。」

と、気持ちの悪い事を言われながら

結局、どんなドレスにしたのかさえ教えてくれなかつた。

肩のあたりまである髪をアップにして頭にはティアラとベール。

そして、ブルースターのブーケ。

サテンヒョースのキャミソールのアラインドレスで

トレーンの部分にもレースが使われている。

可愛いけど、シンプルで甘あざかわ、ナルらしさにな・・・と思つた。

俺のすぐ田の前まで来たナルは、お義父さんの腕を離れ

俺の左腕に手を回した。

少し恥ずかしそうに微笑みながら俺を見上げたナルは

本当に綺麗だった・・・。

ナルと結婚できるなんて・・・4年前は思つても見なかつた・・・。

だけど・・・

今日・・・

ナルは俺の“妻”になった。

結婚式が終わった夜。

俺達は式場のすぐ隣にあるホテルに泊まることになっていた。

明日はここから新婚旅行に出かける。

披露宴のお色直しで淡いピンクのドレスに着替えたナルと俺は

そのままチェックインした。

部屋はちよつと豪華にスイートルーム。

「先輩、コーヒー淹れましょうか？」

部屋に入り、ソファーに腰掛けた俺にナルが言った。

「うん。」

ナルも疲れてるんじゃないのかな？・・・といながら

つい、甘えてしまう。

・・・て、ゆーか・・・

俺には一つ、気になつてゐる事があつた。

ものすいーべ気になつてゐる事・・・

それは・・・

「はー、先輩。」

熱いコーヒーを持ってきてくれたナルはそのまま

俺の隣に腰をおろした。

「ナル。」

俺は「コーヒーに手をつけるよりも先にナルの腰を引き寄せた。

「……先輩っ！？」

私は、いきなり先輩に引き寄せられて驚いた。

「ナル……あのぞ……」

「は、はい……？」

「これから、ナルと一人でやっていく前に……

言つておきたいことがあるんだ。」

「はい……。」

せ、先輩……

もしかして・・・

関白宣吾―――――つーつ（by・さだまさし）

「俺達・・・今日、結婚したよな・・・？」

「はい。」

私と先輩の左の薬指には真新しい結婚指輪が光っている。

それがなによりの証拠。

「ナルは俺の奥さんになつたワケだろ？」

「はい。」

そして、先輩は私の旦那様。

「そこでだ……。」

「はい。」

「……なにか……気が付かない……？」

「へ……？」

「なにか……つて……？」

「何……？」

「いや……だから……。」

「なんですか……？」

「あの・・・ほら、俺とナルはもう夫婦なんだから・・・」

「はい。」

「その・・・自分の旦那さんの事を“先輩”って呼ぶのはおかしくね?」

「・・・あ。」

「ううえば・・・確かにそれはおかしいかも・・・。」

「こつこなつたら名前で呼んでくれるのかと思つてたら・・・」

「「1」「1」めぐなせこ・・・つこ・・・。」

「田舎の事はあつやつ名前で呼んでたのに・・・。」

「え・・・いや、だつて・・・康成さんは

大学の先輩とかじやなかつたからー・・・」

「じゃ、ナルの中では俺はまだ“大学の先輩”のままなの?」

「今はそれだけじゃないですよー?」

「でも、俺まだ一度もナルに名前で呼んでもらつた事ないけど?」

先輩はちょっと拗ねた感じで口を尖らせながら言つた。

「先輩・・・もしかして・・・結構、気にしました?」

「うん・・・まあ・・・。」

「「」、「めんなさい」・・・。」

「まあ、付き合い始めた時に言わなかつた俺も俺なんだけど・・・。」

「

「いえ・・・私も付き合って始めた時に初めて呼んだほうがいいのか
など

思つたんですけど・・・なんか恥ずかしくて・・・タイミングを

失つちぢつて・・・」「、」めんなさー・・・。」

「じゃあ・・・これからひま前で呼んでね?」

「はい。」

それから・・・私が先輩の事をすんなりと“優一さん”と

呼べるようになったのは約一ヶ月後の事だった・・・。

▪ E-mail to me - (後書き)

お陰様で無事完結致しました。

長い間、応援ありがとうございました！

これからも他の作品共々よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1032e/>

ブルースター

2010年10月8日21時41分発行